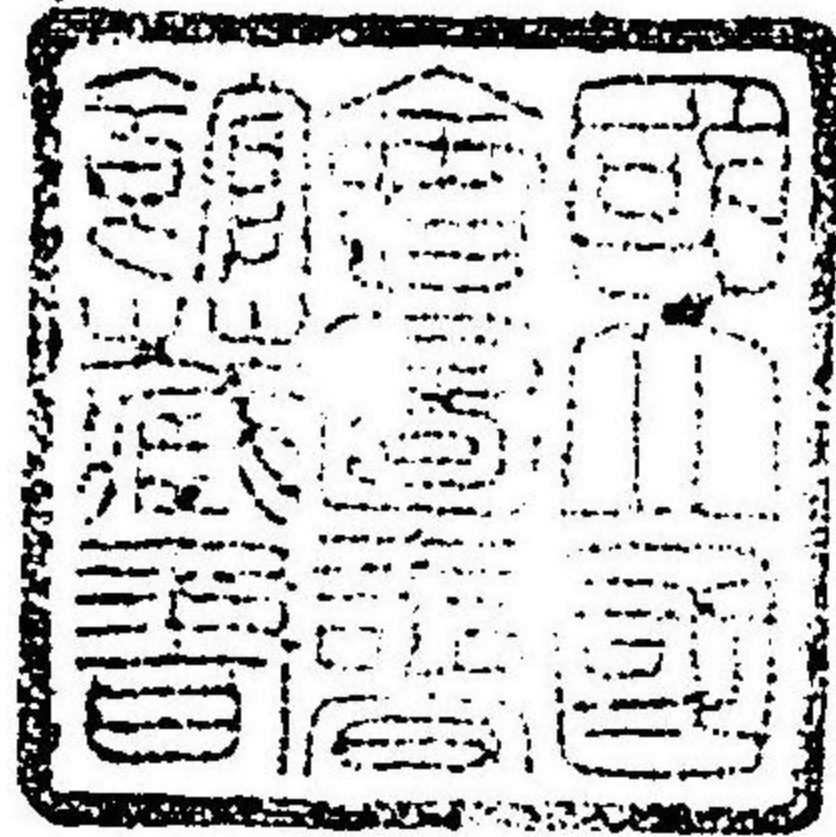


文學博士內藤虎次郎述

清朝衰亡論

京都帝國大學以文會編輯



### 京都帝國大學特別講演發行の序

「大學に遊ぶ者は學に勵むと共に君子の爲人を體得せざるべからず。然るに往々大學を以て單に學藝を究むる處とし、動もすれば道を修め徳に進むの工夫を忘るゝ如き觀あるは憾むべき事なりとす。學術技藝の蘊奧を究むるに於て、帝國大學が獨逸の學風に負ふ所多きは頗る喜ぶべき現象なりと雖も、吾人は又英米の大學が品性の陶冶に重きを置き、智徳兩方面に於て國民の師表となり國家の柱石となる人物を陸續輩出せしむるを見て、欽羨の情禁ずる能はざるものあり。更に眼を轉じて見れば、今日の社會が第一に要求する所は品性の高尚なる人物にあり、而して第二に

序

問ふ所は學識の深淺技藝の巧拙にあり。これ今日の青年の深く鑑みざるべからざる所ならん。且夫れ學や藝や必ずしも人をして成功せしむる所以の道にあらず。知識は一種の魔物なり、之を用ふる其人を得ざれば、知識は實に一身一國を害毒するの具となり了らん。知識の眞光明は高貴なる品性を俟つて始めて發揮せらるべきものなり。加之學問の秘奧技藝の極致は、高尚なる品性の人にあらずんば蓋し之に到達し難からん。京都帝國大學に自今金曜日特別講演を開く。一は學生諸子をして學徳共に淺からざる教授諸君の高風に浴せしむるの機を與へんが爲なりと雖も、一は此講演により、專攻學科以外に學生諸子の心に種々の問題を喚起し、自他を切磋琢磨するの資に供せんが爲

なり。大學が知識の淵藪たると共に一世風化の源頭たらんとするには、是が爲め種々なる設備の存するあるを要す。金曜日特別講演の如き即ち其一端として見るべきもの、余は大學の全員が此特別講演開始の趣旨を尊重すべきを信じ、此講演の今後に對し深く囑望せざるを得ず。

右は四十一年一月十七日特別講演開始の際に於ける岡田總長演説の大要なり。此趣旨によりて特別講演は毎年二回若しくは三回開催せられ、今第九回に及べり。特別講演の趣旨は固より本學々生の修養に資するにあれども、其性質によりては獨り本學々生に限らず、廣く一般讀書界の共有に歸せしむべきものあり。實に大學がその有する諸種の便利を善用して社會一般の利益に供する、これ大學が

廣義に於て國家社會に對する責務なり。以文會が大學の許可を経て特別講演を發行するは亦此趣旨に外ならず。

明治四十五年二月

京都帝國大學以文會專務幹事

## 緒言

此の小冊子は元と「清朝の過去及現在」といふ標題で、明治四十四年十一月二十四日、十二月一日、十二月八日と三回に亘つた京都帝國大學に於ける特別講演、即ち金曜講演の速記である。講演がすんでから、大學の以文會から出版したいといはれたので、粗ば字句の誤謬を訂正した。時局の變遷は日々に猫の眼の如く移つて行くけれども、講演の際は、その時の感想を正直に言つたのであるから、跡から論旨を訂正することは少しも爲ない。尤も時局に小曲折はいくらあつても、大勢の歸着する處は、結局一

てあるとは、講演者の信ずる所である。

明治四十五年一月十五日

講 演 者 識

清朝衰亡論

目 次

第一講 兵力上の變遷……………一頁

支那本部侵入以前(四)——奴兒哈赤の兵制(五)——滿兵と明兵との比較(二〇)——吳三桂の亂(二二)——乾隆時代(二七)——白蓮教匪の亂(三二)——八旗及綠營の腐敗(三三)——鄉勇(三五)——長髮賊(三九)——曾國藩の湘軍(三〇)——洋式訓練とゴルドン將軍(三三)——袁世凱の新軍(三六)——留學士官(三七)

第二講 財政經濟上の變遷……………四一

明末の財政(四二)——清朝の初(四四)——宮廷の節儉(四六)——壯丁税の廢止(四九)——雍正の財政策(五〇)——耗羨の歸公(五二)——捐

例と鹽課(五三)——關稅(五四)——乾隆朝の全盛(五五)——衰運(六一)  
 ——皇族の増加(六二)——地租の未進(六三)——物價の騰貴(六六)  
 ——銀價の變化(六八)——軍費の増加(七一)——釐金稅(七二)——新  
 舊制度の重複(七三)——帝室の資産(七六)——財政と國運(七八)

第三講上 思想上の變遷……………

種族觀念の勃興(八二)——英使マカートニー(八三)——對外戰爭  
 の失敗(八五)——二重の種族觀念(八九)——尊孔思想の變遷(九二)  
 ——老墨の研究(九六)——佛教の研究(九八)

第三講下 結論……………

仲裁講和論(一〇七)——袁世凱(一〇八)——南北分立論(一一〇)——形  
 勢の不利(一二五)——將來(一二〇)

目次終

清朝衰亡論

原名「清朝の過去及現在」

文學博士 内藤虎次郎述

第一講 兵力上の變遷

數年前までは私も其の職業の關係上専ら清國の現在の事情に注意して  
 居りましたが此の京都大學の教官の末席を汚すやうになりまして以來ど  
 うも研究の範圍が段々手廣くなりまして現在の事情ばかりを主として居  
 るやうな譯に參りませぬ。それで今度の問題に就ても見當の附かぬこと

第一講 兵力上の變遷

が多いので、自然十分の豫期を充たし得られぬといふことを承知して置いてもらひたい。

私の演題は清朝の過去及現在と云ふので、三回に亙つて講演致す筈であります。所が今人の聴かんと欲する所は、清朝の過去及現在よりは、寧ろ將來にあるだらうと思ふのであります。私が此問題を撰びましたのは既に一週間も前のことである。考へて見ると、今日から始めて、此講演を仕舞ふまでに満二週間あります。清朝の現在の模様では其間にどう云ふ風になるか分らぬ。私の講演して居る間に、清朝の過去と現在だけは確かにありませうが、將來があるかどうかと云ふことは疑問である。それで先づ將來だけは見合はせにして置きました、併し若し私が講演を仕舞ふ當日までに、將來があつたならば、少し位は將來に亙る積りであります。

此講演は前申す通り今日からして三回に亙りますが、私の豫定では、或る事柄に就て毎回多少纏まつた話になるやうに致したいと思つて居る。そ

れで過去及現在と申しますと、随分範圍の廣いことで、何を話すも差支ないやうなものである。又何處まで饒舌つても切りが無い。最も實はさう云ふやうなことを豫期して斯う云ふ題を撰んだ。詰り目下の形勢は毎日々々清國の事情が變つて居るから、今日此處へ出るまではどう云ふ話をするところが適當であるかと云ふことが分り憎くかつた。段々昨日までの模様で、先づ是ならば今日御話しても安全と思ふことだけを御話するのでありますから、それで何を話しても宜いやうに題は極めて居つて、さうして毎回、一項々に纏まつた御話をしやうと思ふ。それで今日は清朝が興りましてから以來の兵力の變遷のことに就て重もに御話を致します。

此兵力の變遷と云ふことは清朝の今日の衰運に至る經歷に就て重きを爲して居る。勿論國の興る時に兵力が大なる要素で無いことは無いのであるから、それと同じく國の衰へるのも兵力の衰頹が大なる原因で無いことが無い。それで今日は主に其の兵力に就て話すつもりである。さして

第二回の講演に於て經濟上の變遷と云ふことを御話する積りである。第三回講演のことは一寸今極め難い、詰り將來があるか無いかに依つて極めたいと思ふ。

### 支那本部侵入以前

清朝の兵力と云ふものは清朝が未だ支那の本部に入らない、即ち北京の都を取らぬ時分から既に著しく其特色が目立つて居つた。勿論清朝の興りました滿洲の土地と云ふものは昔からして支那人から言ふと勿論野蠻人であるが、随分強い民族の住まつて居つた所である。今の清朝の朝廷では之を滿洲と云ふが、前代では女真若くは女直と言つて居つた。女直に就ては随分昔から強いと云ふ諺があつた。即ち女直は萬に滿たず、萬に滿つれば敵すべからずと云ふ諺があつた。即ち女直人は一萬人と纏まつた兵隊は無い若し一萬人纏つたならば敵すべからざる程強いと云ふ諺があつ

た。斯う云ふ風に兎に何此民族が強いと云ふことは昔から評判になつて居つた。尤も此民族は北方から興つたから、どうかすると蒙古人と一所に見られるが、蒙古人とは大分譯が違ふ。蒙古人は遊牧人であるが、滿洲人は初めから遊牧人ではない。それで清朝の歴史家なども滿洲人は射獵によつて生活して居る民族ではあるが、遊牧民では無いと言つて居る位で、實際蒙古人などは大分に違ひます。そこで滿洲人は昔から強いと云ふことが言はれて居るが、其強さの程度と云ふものは、外の強い民族に比べて見てどうかと云ふことが一の疑問である。先づ東洋各國の中の強い民族として我日本を第一に擧げて見やう。さうすると日本とどう云ふ風に強さが差があるかと云ふことを比べられる標準が幸にしてあるのである。

### 奴兒哈赤の兵制

それには一寸其前に少しばかり滿洲の初めに出来ました兵制のことを



承知しなければならぬが、何人でも聞いて居らるゝ通り、滿洲と云ふものは國が興つた當時から兵隊を八旗と云ふ組織に致しました。それは滿洲の元祖である清の太祖奴兒哈赤と云ふ人の立てた兵制でありまして、一番小さい隊は三百人を一の單位として、それから段々上つて行くのであるが、三百人の五倍したものを又一の大きな隊とする。又それを五倍したものを一の隊とする、それを一旗とする。だから一旗の兵は七千五百人である。それで全體八旗の兵で六萬人になる譯である。後には蒙古八旗、漢軍八旗といふものも出來ましたが、最初には純粹の滿洲八旗と云ふものを第一の土臺にして興つたのである。

此兵隊が戦争の法としてどう云ふ陣立を取つたかと云ふことが清朝の實録に書いてある。勿論其八旗の組織をした時にそれに関する兵法の本を作つたと云ふことがあるが、其兵法の本は今も傳はつて居ない。けれども大體だけは清朝の實録に遺つて居る。其陣立を見ますると、敵と接戦を

する時には堅い甲を着て、さうして長い矛、それから大きな刀を取つて居る者はそれを先鋒とする。それから軽い甲を着て弓の上手な者は其後ろからして敵の方に向つて衝突するやうに陣立をして居る。此堅い甲、軽い甲と云ふのは滿洲に甲の制度があつて、之には鐵甲と綿甲とがある。滿洲の鐵甲と云ふのは緞子若くは木綿で以て當り前の着物のやうなものを作り、其裏に丁度二寸位に一寸三四分の大きさの薄く鍛えた鐵板を鐵の釘で綴ぢ合はせてある。さう云ふものを袖にも胴にも着、それから草摺になると矢張り日本の鎧のやうに細かい長方形の鐵の札を編んだものを緞子若くは木綿の裏へ結附けてある。盔も鉢は蒙古又は朝鮮と同様の鐵製のもので鍔だけはやはり緞子又は布片の裏に鐵板を着けてある。此の鐵甲を指して、堅甲と言ふのである。綿甲と云ふのは其鐵の札の全く無いものである、緞子若くは木綿製である。大將などは緞子製のものを着て、普通の兵隊は木綿で鎧の形に作つたものを着て居るだけである。輕甲と云ふの

は即ち此の綿甲を着て居る者を言ふのである。

さう云ふ風に鐵甲を着る兵と綿甲を着る兵と二様に別れて、鐵甲を着て居るのは前列になり、それは大きな刀、長い鎗を持って居る綿甲の者は其後ろに立つて、是は射手である。其外に精兵がある。此第一列第二列になるものは皆馬から下りて居る——一體滿洲人は全部殆ど騎兵と言つて宜い位であるが、是等は馬から下りて居る——それから精兵だけは馬から降りさせずに別の所へ隠して控へさせて居る。さうして是は戰の機會を窺つて敵陣に突入するやうに出來て居る。是が滿洲の陣立の仕方である。是を殆ど同時代、即ち日本の戰國時代の陣立に比べて見ると大分違ふ點があるやうに思はれる。

日本の中世の陣立も色々兵法の流義があつたけれども、段々鐵砲が出來てから、其時分の鐵砲の持手は足輕で、是が最初に遠距離の間に鐵砲を打つてそれが引退く。其次に射手が居つて散々に矢戰をする。それで以て段々敵と味方の距離が接近すると、其背後から鎗を持つた兵が突進して鎗を

合はせると云ふやうな事になつて、最後に旗本の武士が短兵で接戰をする。と云ふのが日本の普通の陣立のやうである。滿洲のとは順序が反對になつて居る。滿洲人は鎗が眞先で弓が其蔭に隠れて居る。詰り滿洲の陣立は其鐵甲を着て居るものを日本で言へば敵の矢丸(其時分丸は無かつたらうが)を防ぐ盾の代りに使つて居る。弓を射る奴は蔭に隠れて居つて身體を輕くして居つて、其蔭から弓を射るやうになつて居る。さうして敵陣が亂れた時に、最後に騎兵が横合から突入して敵陣を蹂躪すると云ふ遣り方である。是は陣立としては良いか悪いか、即ち日本のやうに段々戰が酣になるに隨つて短兵で戰ふ、今日の詞でいへば白兵戰をするといふことが良いか悪いか、是は別問題として、兎に角其陣立の仕方から見ると日本の方よりか億病な陣立の仕方であると云ふことは明かである。詰り矢などを射られても少しも恐ろしくない者を眞先に立て、其蔭から戰をす

る遣り方である。是で先づ日本の兵に比べた所の強さの程度といふものは大分明瞭に分る。日本兵のやうに初めから敵に打たれると云ふことを覺悟して遣るのと少し譯が違ふやうに見える。

### 滿兵と明兵との比較

それから之を蒙古の盛んな頃の兵に比較すると、是は一吋時代も違ふので、さう云ふ陣立の上から比較も出来ぬが、兎に角戦争した成績から見ると、矢張り蒙古の盛であつた時、即ち元の初期の方が餘程強かつたのである。元の興る時の戦の仕方は非常なものであつて、其の相手になつた國、金でも、南宋でも、それに對抗することの出来るやうな仕方ではなかつたのである。が、滿洲の興る時には、滿洲と對抗した明朝の戦の仕方でも相應に對抗が出来たのである。それは明の兵が強いからかと云ふと決してさうでない。滿洲軍があまり強くなかつたのである。明の兵の強さは是は日本の朝鮮

征伐の時に日本兵との比較が取れて居るが、それが戦に慣れた所爲でもあるか、明が末年になつてからは段々却て滿洲の兵に對抗し得るやうになつて來た。尤も明の方でも最初は滿洲の兵が大分強いと云ふので、野戰をするのは不利益であると云ふことになつて居つて、明の弱い兵をどう云ふ風にして滿洲に對抗させやうかと云ふことに就ては、明末に遼東を經略した袁崇煥などが餘程考へて苦心した點であつて、それに就ては野戰をしては損であるから、堅固な城壁を作つて、さうして其時分初めて西洋から輸入された火器で以て打拂ふと云ふことになつて、それで先づ明の兵が滿洲に對抗すると云ふ素地を作つた。所がそれが果して當つて、今までは清朝の太祖は殆ど百戦勝たざることもなかつたのが、寧遠と云ふ處の城を攻めた時には、今言ふ流儀で城壁を固めて西洋の火器で以て防ぐと云ふ手段の爲めに、詰り清の太祖が敗北した。今まで一回も敗けたことがないのに酷く敗北して、それを苦に病んで死んだと云ふことであるから、此の方法は明軍に於

て大に當つたのである。當つて勝つて見ると滿洲の兵もさほど恐ろしく無いと云ふ自信が出来て、段々明の兵から強いものが出た。祖天壽、祖大弼といふ兄弟の名將があつて(最も後には滿洲を降参したが)殊に其兄弟の中で弟の祖大弼は非常に強いので、或る時は清の太宗の陣營に迫まつて、さうして短兵で接戦して、殆ど太宗の馬腹を切り附けるまでに切込んだと云ふことがある。又或る時には太宗の陣營に夜襲を企て、火薬を陣營で爆發させて大に決戦したことがあつて、明の兵もなかく、後には強くなつたのである。それであるから、明は亡びた結果として滿洲に土地を横領されたけれども、其實、明の兵は滿洲兵の爲めに亡ぼされたのでなく、内亂に亡びた處へ滿洲兵が北から之を襲ひ取つたので、非常な僥倖もあるのである。尤も是だから滿洲兵が弱いとも言へぬが、蒙古のやうに當る所敵無く支那人を切り平げて國を取つたのと大變に違ふ。先づ強さの程度は最初からそれ位のものであつたのである。

清の太宗の時代には、幾度も北京附近から、山東省邊までかけて、侵入してあらしめたけれども、山海關外の四城が落ちないので、とうとう明を亡ぼす目的は達しなかつたのを、清の世祖が位を嗣で、幼年の時、明が内亂に亡びたのを、其時に山海關を守つて居つた吳三桂が、甲合戦をする爲めに滿洲兵を借りたのが元になつて、清の攝政睿親王は吳三桂の依頼を承知して甲合戦が成功をしたので、そのまゝ、遂に北京を取つて仕舞つたのであつて、隨つて國を建てることだけは成功した。成功したが土臺が其位の強さの兵であるから、間もなく餘り強くないと云ふ證據が又現はれて居るのである。

### 吳三桂の亂

清朝が北京に乗込んでから三十年ばかりして、清朝の兵を導いて明を亡ぼした吳三桂が謀反を企てた。吳三桂は大分前から遼東にあつて、戦を経た宿將で、清朝が明を亡ぼす際にも、大に骨折て功があつた。清朝の兵を北

京に入れてから清朝の手先になつて支那中の土地を打平らげ、最後に雲南に藩王に封ぜられて居つたが、康熙十二年の末に謀反をした。此時に吳三桂は既に七十以上の老人であつたが、其反亂は清朝に非常に打撃を與へたものである。七十以上の老人であるけれども、百戦を経た老將であつて、其下には是も百戦を経た幾多の大將が付いて居る。それで以つて謀反を企て、雲南から貴州に押出し、それから湖南まで押出した。吳三桂同様に明から清朝に降参して功を建て、藩王に封ぜられて居つた者が、耿仲明は福建に、尙可喜が廣東に封ぜられて居つたが、是も聯合して謀反をしたので、支那の南方は大騷亂になつた。湖南まで押出して來たのを、清朝では勿論大軍を擧げて防いだ、其時には既に明を取る時に大變に骨を折つた皇族や大將などは大部分亡くなつた人が多いので、逆も吳三桂に敵する程の名將は無かつたと云ふことで、それで清朝の兵の見苦しかつたことは非常なものである。能く吳三桂の兵に遭つては逃げ廻はつて居つたのであるが、然る

にどうして其亂が平らいだかと云ふと、吳三桂は餘り年を取つて居つて、軍事にもあまり慣れ過ぎて居つた。慣れ過ぎると大事を取り過ぎる。それで湖南省の洞庭湖の畔の岳州まで進んだが、岳州から湖北の境へは一步も進で出なかつた。其時に吳三桂に應じて、四川から、陝西あたりまで、清朝に叛いた位であるから、湖北から中原に進んで、ノルカソルカの決戦をしたならば、随分形勢がどうなるか分らぬ位の大事にまでなつたが、吳三桂が餘り大事を取り過ぎて、岳州から進まない。其時に康熙帝は僅か年が十九か二十であつたが、若い時から鋭敏で且つ大變な精力家であつて、一日に八方から來る軍事の報告は自分一人で眼を通して大臣を側に置いて斯う云ふ方針にしる、斯う云ふ方針にしると云ふ風に、一々皆口授をして朝から晩まで凡そ三四百通の奏疏に可否を決してやつて、兵事を指揮して居つた。それで兵は弱くて屢々逃げるが、防備配置の手順が良かつたので、大敗に至らない中に、吳三桂は老死したので、此の大亂を甘く征伐し終つた。其時の兵力の

配置の手續が良かつたと云ふのは、其當時にしては、仲々文明的な點であつて、北京から西安までは凡そ清里、二千六百五十里、荊州までは三千三百八十里あるが、五日で報告が達する。浙江は三千三百里であるが、四日位に到達した。甘肅あたりの大分西の遠い處で、五千餘里の地方へは九日間に到達した。一日に支那里數で五六百里から七八百里を馳するのである。これは清朝の驛遞制度で、一日に五百里の報告とか、六百里の報告とかいふものがあるが、それを更に敏速に利用したのである。詰りさう云ふ風に、手續が旨かつた結果、清朝は勝つたのである。勝つて居るが、矢張り其時に勝つた要素としては、結局は滿洲人の兵力の強いので勝つたのでなく、其征伐の大將としても主として漢人を用ひて勝つて居る。康熙帝の方針は斯う云ふのである。昔から漢人の叛亂を平げるには漢人を使ふのが法則である。それで滿洲人が出て行く必要がないと云ふので、漢人に骨を折らせた。それで其時に戦争に功を立てたのは多くは漢人である。詰り漢人を漢人で征

伐したのであつて、滿人の力を以て吳三桂の兵を征伐したのではなかつた。是等の結果からして、滿洲人が腐敗に陥つて居つたと云ふことを斷ずるにはまだ早い。詰り滿洲人が眞成に實力の強きを以て大亂を平げたのであると云ふことだけは明かである。

それからして康熙帝の次は雍正帝であるが、此人も能く漢人の大將を用ひたのである。雍正帝の頃に非常な名將で岳鍾琪と云ふ人があつた、勿論漢人である。漢人の書生で此人に謀反を勧めた者がある位に強い人であつた。此人は戦は旨いが、謀反をするだけの度胸がなかつたから、之を勧めたものを朝廷に突き出して、嚴罰に處せしめた事がある。

### 乾隆時代

其次の帝、乾隆帝の時、即ち清朝が明に代つてから九十餘年を経た頃から、清朝で大將を用ひる方針が變つて來た。乾隆帝は大分滿洲人を用ひると

を努めた。乾隆帝の時に征伐の上に功を立てた人は滿洲人に多い、中には臺灣や西藏の方を征伐した福康安、海蘭察など、云ふやうな人は皆滿洲人であつて、戦功を立て、居る。併し此戦功の立て方は滿洲人が強いから戦功を立てたと云ふのでなく、寧ろ其時に非常に清朝の財政が豊富であつた結果である。金が十分にあつて、詰り金に飽かして此征伐に成功して居るのである。即ち從軍將卒の恩賞を非常に厚くして、彼等を大に勵まして漸く遣つてのけたのである。一體將卒に對する賞與と云ふものは、清朝では乾隆帝に至つて初めて重くなつたのであつて、最初清朝の興つた時分は恩賞が至つて手薄かつたものである。例へば戦功を立て、戦死しても、大抵は其子の中の一人を特別待遇として國士監即ち大學に入學させて本を讀ませると云ふことを許す位が大變な恩賞であつた。清朝の初め支那の土地を平定するのに大功のあつた人は、明から降参した人で、洪承疇と云ふ人であつた。此人が五省の經略に任ぜられて大功を立てたが、それでさへも

三等輕車都尉と云ふ甚だ低い爵位に封ぜられて居る。此爵は清朝の封爵の規定に依ると、二十幾等位にしか當らぬ。非常な大功を立てたものをそれ位の所で濟ませて居る。吳三桂の亂の時に功のあつた漢人の名將の中で有名な趙良棟とか、王進寶とかいふ人々でも、僅に子爵位であつた。所が乾隆の頃になつてそれが非常に重くなつた。此時に功を立てた福康安などは公侯伯子男を越えて郡王の爵を貰つて居る。斯う云ふ風に大變な相違を生じて來た。是は太平が段々引續きたるために、非常に恩賞を重くするでなければ人が働かないと云ふのが、勿論重なる原因である。それから拔擢の仕様も大變に破格なことをして居る。少し功を立てたものがあると、僅一年か半年の間に二級、三級、四級、五級も飛越して官が進むと云ふやうなことをして居る。是等は皆乾隆帝の代に至つて初めてさう云ふ風になつたのであるが、此時代には漢人に功を立てさせずに、成るべく滿洲人に功を立てさせるやうに勉めて居る。此乾隆帝は支那の學問にも

深かつたのであるが、それが反つて滿洲の國粹保存を盛にやつた人であつて、段々滿洲から這入つて來た八旗が支那風に化するのを抑へやうとした。昔金の時代に世宗と云ふ天子が國粹保存主義を大變主張したことがある。滿洲では太宗も金の世宗を學んだことがあるが、乾隆帝も亦それが大變に善いと云ふので、其真似をして盛に國粹主義を行つた。滿洲語の辭書を編纂して、元來貧しい語數を漢語の翻譯語で強て豊富にして、國語の保存にまで努めた人であるから、政治上重要な位置には多く滿洲人を用ゐると云ふことを努めた。

此帝の在位は六十年間であつて、二十五歳に即位して八十五歳位まで位に居り、子の嘉慶帝に位を譲つてからも四年程生きて居つた。晩年には乾隆帝の施政の方針が益々寛大に、寧ろ不取締に流れて來た。それで此天子は位を譲つてからも、太上皇と稱して、矢張り日本の太上皇のやうに訓政と云ふことを始めて居る。近頃西太后が訓政を言出したのは、其真似をした

のであつて、餘り結構でない例を作つたものである。此天子が生きて居る間は、位を去つても實際政治の權を握つて居つた。それで無暗に寛大で不取締の結果、有名な貪汚の權臣、和坤といふ者などが氣に入り、政治が腐敗したあげ句に、乾隆の末年から嘉慶の初年に掛けて七年間程、全く平定するまで殆ど九年間掛つて居る支那で大變な一揆騒動があつた。

### 白蓮教匪の亂

即ち白蓮教と云ふ一種の邪教の一揆が起つて、それが湖南、湖北、四川、陝西の四省に互つて起つた。是は全く一揆の騒動であるけれども、其一揆の爲めに七年間も大騒を造つて居つたのである。其爲めに軍費も一億萬圓以上使つて居る。其時には滿洲八旗の兵が役に立たぬので、其の大將などは失敗をして居る。失敗をしたものは嚴罰に處すると言つて居るが、其實嚴罰に處せられずに、屢々寛大な處分を受けて居る。此時には尤も滿洲朝廷



の取縮、紀綱は弛んで居つたのである。詰り乾隆帝の時は清朝で一番全盛の時であつて、乾隆帝自らも大に之を誇りとして、十全記と云ふ文を作つて自己の功績を誇つて居る。それは準噶爾と云ふ蒙古新疆地方の野蠻種族を征伐したことが二回、それから新疆地方の回教徒を征伐したのが一回、四川の西方金沙江(即ち楊子江の上流)地方の征伐が二回、臺灣平定一回、安南征伐一回、それから西藏の西南廓爾喀二回、是で十回である。此十回で武功を全うしたと言つた居る。併し實は此全うしたと云ふのも支那流の全うしかたであつて、廓爾喀を征伐した時などには、廓爾喀人が西藏に攻め入つたのを澤山な兵隊を連れて行つて僅かの敵兵を追ひ散らすのである。それでも段々國境の險阻な所になつて來ると、とても攻められぬから、使者を遣つて降参をしたらどうかと勸誘をして降参させたやうな譯で、支那流の戰爭の成功であるから大分譯が違ふ。けれども兎に角乾隆帝自身でも十全と云ふことを大變な誇りとして居つた。勿論清朝を通じて全盛の時代で

あつたのである。其全盛の時代に既に滿洲朝廷が自身で滿洲人を使ふのに、さう云ふ莫大の恩賞を要し、寛大な處分をしなければどうしても使はれぬやうになつて居つた。是が滿洲の兵隊が先づ明かに缺點を表はして來た事實である。

今申した白蓮教匪の亂は滿洲兵の缺點を表はすと同時に又後來に大なる弊害を遺した。此白蓮教匪の亂は清朝兵力盛衰の推移には大變な重い關係を持つて居るので、高が一揆騒動に過ぎぬのであるが、さう云ふ關係上に於て輕視すべからざる事件である。

### 八旗及綠營の腐敗

又立歸つて清朝の兵制のことから申しますが、清朝の兵制は前にも申しました滿洲八旗は勿論是は重要なものになつて居るが、其後之に蒙古八旗が加はつて居り、それから漢軍八旗が加はつて居る、之を禁旅八旗といつて

北京に居る。日本の近衛兵といふよりは、徳川幕府の旗下のやうなものであるが、それが十萬人、二十四旗の兵で組織されて居るが、此外に地方の兵は八旗の分遣隊のやうなものがあつて、それは各省に皆ある譯ではないが、重要の土地に駐防八旗と云ふものを置いて居る。駐防八旗は一ヶ所三千人位である。此外に各省に漢人より組織した兵即ち綠旗兵（普通綠營と云ふ）がある。是は各省の常備軍であつて、其上に駐防八旗が監督して居り、地方の安寧を保つやうになつて居つたのである。所で嘉慶の時は白蓮教匪が起ると云ふと、各省の綠兵は役に立たず、それから駐防八旗も役に立たず、又北京から送られて來た禁旅八旗も役に立たず、何もかも清國の常備兵は役に立たぬと云ふことが證據立てられた。さう云ふことから勿論長く騷亂が續いた譯であるが、軍隊の弊風は久しい以前からあつたので、第一に乾隆帝の時王爵に進んだ福康安などは既に其弊風を長じて來て居つた。乾隆時代の大将等は、大抵征伐に出掛けると、歸つて來る時には皆非常に金持に

なつて來た。それが爲めに乾隆朝には僅かな騷亂を征伐するにも、征討費が非常に澤山入つて、前申した金沙江の征伐の費用が七千萬兩か八千萬兩程要つた。又白蓮教匪の亂の時にも非常に大将達には結構な機會で、費用の大部分は皆此大将が着服して仕舞つたのである。それで此亂が長く續いて急に納まりが附かぬ。結局一億萬兩以上の金を使つて居るやうな譯である。併し如何に清朝の財政が豊かな時であるとは言へ、さう七年も八年も續いては堪へ切れなくなつて來た。

### 郷勇

そこで乾隆帝の次の嘉慶帝は其取締を非常に嚴重にして白蓮教匪を平げたが、それに就て兵制上でどう云ふ手段を取つて平げたかと云ふと、郷勇、即ち地方の義勇兵に頼つたのである。それは初めは湖北の隨州といふ土地で白蓮教匪が押し寄せて來た時に、どうしても官兵に防備を任かすと、何

時でも官兵が逃げて跡は教匪に蹂躪される。ソコで人民が悉く其防備に當ると云ふことを覺悟して、所謂堅壁清野の方で、城外の土地は焼拂つて、さうして壕を非常に深く掘つて、一城の人民悉く擧つて皆其城を守ると云ふことに決心した。すると今更で連戦連勝の白蓮教匪が到頭隨州を攻め落す譯に行かなかつた。そこで朝廷の方でも此土地のものを其儘義勇兵にして使ふと云ふことは大變に效能があると云ふことを承知して、段々と義勇兵を使ふことになつて來た。義勇兵を使ふことになると、官軍の正式の常備兵の大將連は益々ズルイことを考出した。元來綠旗兵即ち各省の常備兵は戦死すると、幾人戦死したと云ふことを朝廷に報告しなければならぬ。又禁旗八旗と云ふ近衛兵が戦死した時には誰某が戦死したと云ふことを一々朝廷に報告するのである。それはどうしても隠す譯に行かぬ。所が民間の義勇兵を使ふことになると、何人の兵を臨時に募集したとか云ふやうなことを出鱈目に報告して置き、何人戦死しても是は報告せんでも

宜い。さうすれば勝たか敗けたかも、曖昧に付される。是は大變重寶だと云ふので無暗に義勇兵を募つた。食物や何かは地方のものを取り、詰り兵器だけを渡せばそれで宜いのである。

是が地方防禦のみならず、野戦にも使ふやうになつた。そこで其陣形が面白い。第一列に義勇兵を眞先に立て、その尻に綠旗兵が附いて行く、又その尻に北京から來た禁旗八旗が附いて行く。義勇兵が眞先に酷い目に遭つて、それが敗北して逃げて來ると、第二列に居る綠旗兵が此逃げる奴を斬る。それでも支へ切れぬので綠旗兵が逃げ出すと、一番後の禁旗八旗が此逃げる綠旗兵を斬ると云ふ風になつて居る。所が段々續くと白蓮教匪も考出した。是は義勇兵即ち地方の人民見たいなものと戦争して居つても何にもならぬといふことを考へ出して、それで或る地方を侵略すると云ふと、無暗に澤山捕虜を作つて來る。さうして其捕虜に兵器を持たせて之を戦争に使ふことにした。それで白蓮教匪の陣立も、先づ捕虜を眞先に立て

て、それを義勇兵と戦争をさせたのである。詰り眞先に立つて酷い目に遭ふのは、矢張り兩方とも土地のものである。それで死んでも正直な報告をするに當らぬ。酷く便利であるから大變利用した。それも段々續くと弊害が色々と出来るから、乾隆帝が死んで嘉慶帝の親政になつてから、義勇兵の功勞のあるものにも恩賞を遣るのが適當だと云ふので、義勇兵の將校も常備軍の方から申立て、恩賞を遣ることになつた。どうにかして亂は平いだが、併し其時に義勇兵の大部分は恩賞に漏れて居る。兎に角亂の平いだのは其時の義勇兵の力であつて、常備軍の力でなかつた。

是は清朝の兵制が大變な變化をする土臺を作つた。當時の地方官で已に此の機微を察した人があつた。其人の思ふには、義勇兵を徵發して使ふのは酷く便利であるが、是は朝廷の大計から言ふと大變なことをして仕舞つたものである。斯う云ふ風に人民に無暗に兵器を與へて、さうして人民が兵器さへ持てば、戦争が出来るものと云ふ觀念を與へた。そこで隨つ

て官兵は恐ろしくないものだ、と云ふ觀念を與へたことに氣が附いたのである。尤も嘉慶の時には亂が濟むと人民が持つて居つた兵器を買収すると云ふ名義で、金をやつて兵器を取上げて解散せしめた。その時は大したことなしに終つた。併し其時から清朝の從來の兵制の役に立たぬこと、それから兵制が一變しなければならぬものであると云ふことが分つて居つたのである。

### 長髮賊

さうして居る中に近年の長髮賊の亂が起つた、是が今から六十年許り前に發して十五年間程續いたもので、是は嘉慶の時の亂どころでなく、支那の十八省至らざる所なき程の騒亂に陥つたのである。此騒亂になつてから益々前の嘉慶の時に見はれた徵候が事實になつて來た。此騒動が出來てから鎮定するまでの間のことを簡單に言つて仕舞へば、詰り此亂を平定し

たのは矢張り義勇兵の力は依つたのである。其時に功を立てたのは曾國藩、胡林翼、李鴻章、左宗棠と云ふやうな人であるが、是等の人は皆義勇兵で功を立てたのである。長髮賊は廣西省から發して湖南、湖北を経て南京まで真直に突貫して行つた。其時からして既に多少義勇兵を持つて、軍に従つて居つた人、たとへば江忠源などのやうな人があるが、騷亂の初期に常備軍が征伐に従事して居つた間と云ふものは、逆も長髮賊の軍隊に對抗すると云ふ力は無かつたのである。そこで此長髮賊と云ふものゝ力に對抗する兵隊を作り出したのは曾國藩である。

### 曾國藩の湘軍

曾國藩は湖南の人であつて、當時已に禮部侍郎の官まで進んで居つたが、丁度母の喪に服し、郷里に引籠つて居たのであるが、天子も此人を幾らか頼みにして、それで兎に角義勇兵を募らせた。けれども最初の目的は天子も

湖南地方の鎮撫の爲めに募らせたのであつて、曾國藩も勿論地方を鎮撫すると云ふ考で義勇兵を作つた。所が長髮賊が一旦南京まで侵略して行つて、それが又引返して長江を遡つて湖南まで逆に侵略して來た時に、其時に初めて曾國藩が訓練した所の義勇兵が長髮賊と衝突した。衝突して見ると、此義勇兵が仲々強かつた。其強かつた所以は、曾國藩は初めから常備軍の實に役に立たぬことを見抜いて居つたので、兵隊の訓練の仕方にも全く官軍の兵隊の訓練の仕方を用ゐなかつた。彼の明の時に倭寇征討に功を奏した有名な戚繼光の書いた紀效新書(日本でも徂徠などが感服して翻刻されて居る)といふ兵書を讀んで、それに依つて兵隊の組織をした。其時に曾國藩の友人である朱子學者に羅澤南と云ふ人が、此の義勇兵訓練に參與して大に働いた。此人は地方に自分の弟子を持つて居るので、將校には自分の門人を使つた。それで曾國藩も此人に萬事を委任して、門人で將校を組織して、常備軍の制度は少しも採用しない。常備軍の將校などを借りて

兵隊を訓練すれば、どうも常備軍の悪い風が移ると云ふので、少しも之を採用せず、今までもまるで戦をしなかつた素人が、まるで本の上から研究して軍を組織して遣つた。所がそれが愈々戦争に使つて見ると結果は悪くはない。と云ふのは別に武器は良いものを使ふ譯ではないが、將校との間は子弟の關係である、又土地に關係のある人で、皆顔を知つて居るものを兵隊に使つて居る。勿論義勇兵と言つても所謂應募兵であつて給料を遣つて使つて居るのである。斯かる給料で備はれた應募兵ではあるが、さう云ふ風に將校との團結が非常に固かつたので之を使つて見ると、官軍が逃げる所も義勇兵は逃げない。それで非常に義勇兵が效能のあるものであると云ふことが分つて、さうして陸兵もさう云ふ風に訓練し、又水軍もさう云ふ風に色々工風して訓練した。それで水陸兩方の兵で段々長髮賊を征討することになつた。此が所謂湘軍で、長髮賊平定の大功を奏したのである。併し此時に既に此等の義勇兵の將卒が自分は關係のある大將の爲めに

動くのであつて、朝廷の命令などでは動かぬと云ふ證據が擧つて來た。それは曾國藩が湘軍を統率して湖南から湖北、江西省まで行つて居つた時に、八方から敵軍に圍まれて大變に難義をしたが、丁度其時に曾國藩の父がなくなつて自分は喪の爲めに引込んで郷里に歸つたことがある。其間の湘軍は此中心が無くなつたから、曾國藩部下の將校等が、各隊各隊に分れて其軍を率ゐて居つた。是は勿論義勇兵と言ひながら朝廷の爲めに働いて居るから、理窟から言へば朝廷の官吏の命令を受けて働くべき所である。所が江西の巡撫、それから朝廷から新たに派遣された大將などが、曾國藩が訓練して使つて居つた兵隊に對して色々な命令を發しても、一つも行はれない。誰も朝廷から來た官吏の爲めに働いて呉れない。けれども朝廷の命令よりも自分等の屬して居る主將の爲めに働くこと、既に其時より段々分つて來て居る。兎に角さう云ふものを利用して曾國藩は幸に此大亂を平げて仕舞つた。是れは曾國藩とか胡林翼とか云ふやうな有名な

人があつて、自分の部下を使ふと言つても、日本の陸軍のやうな具合に、上級と下級との將校との關係で使ふのでなく、師友の關係で激勵して使つた。それだから上官の命令で働くやうに機敏に行かぬが、恩義に感じて奮戦したので長髮賊の大亂を平げたのである。

愈々平げて見ると、今度は義勇兵の解散と云ふことは到頭出来なくなつて仕舞つた。非常に大きな地方に亙つた騷動を平げた處の義勇兵は、先づ湖南省(これは湘勇といふ)それから李鴻章の出身地の安徽省(これは淮勇といふ)、それから胡林翼が長く巡撫をして居つた湖北省から、これは楚勇といふ義勇兵を募つた。それが愈々戦争が終ると、兵器を買収して追ひ返へす譯に行かぬ。それで支那の制度としては從來の常備兵は名義上存して置て、それに向つて給料を拂つて往かなければならぬが、今度新らしく出来た義勇兵は、矢張り一種の常備軍と見て、さうして特別な給料を拂はなければならぬやうになつて、二重の兵制を維持せなければならぬこととなつた。

### 洋式兵器とゴルドン將軍

李鴻章は此の戦争の最中に、已に彼の有名なゴルドン將軍等に頼んで、此の義勇兵に洋式の訓練をやつて貰ひ、それが最も效能があつて、所謂常勝軍といふものになつたので、それから以後義勇兵に洋式の兵器を携帯させることが行はれて來た。曾國藩が亡くなつてから、李鴻章が主として支那の政治に當つて居つた時には、つまりさういふ義勇兵に對して洋式の兵器を授け、それで以て精兵が作られるものだと思つて居つた。ところがそれが日清戦争で一つの經驗が出来た。李鴻章の考では西洋風の操練をして西洋の良き兵器を持たせて戦争をさせたならば、何處と戦争をしても立派に勝利を得られるものであると思つて居つた。又西洋人なども是位の兵が居つて新式の兵器を持つて居るから支那も偉いものだと思つて居つた。ところが日清戦争で日本兵と衝突して見ると、どうも矢張りそれではいけない。

李鴻章の幕下などで洋式の兵器を持つたといふ義勇兵が日本兵に手向つて見ると、さんぐに敗られて仕舞つた。それで兵備に關する考が又一變して、今度は全く根柢から新式の教育もし、組織もしなければならぬといふ時代になつて來た。それが今そこら中で革命を企て、居る新軍の起源である。

### 袁世凱の新軍

日清戦争が止むと、どうも今迄の支那風の遣り方では往かぬ。西洋の兵器を持たせたり、西洋人を頼んで海岸の防備位したつて、ほんとうの軍備は出來ない。矢張り日本なり、西洋なりから士官を備つて來て、それに依つて純洋式の訓練をして新らしい兵を作らなければならぬといふことになつて來た。その真先に訓練を始めたのは有名な袁世凱である。袁世凱はその時に小站といふ處で始めて一萬ばかりの訓練を遣つて見た。それが大

變に效能があつて、北清事變のある前からして支那では袁世凱の兵だけは最も良い兵であると云ふことが評判になつた。北清事變が起ると、袁世凱は山東に引込んで、外國の兵隊と衝突しなかつたから、その強さの程度が解らなかつたが、兎に角袁世凱の兵ならば外國の兵に立派に當ることが出來ると一般に信じて居つた。そこで北清事變が済むと、袁世凱は直隸總督に任ぜられて、自分の今迄の訓練して居つた倍數の兵を訓練した。それが今の直隸の第幾鎮々々といふもの、基になつて、今日の新軍といふものを成立たすことになつたのである。

### 留學生士官

處でこの今日の新軍となると少し制度が異つて居る。兵隊は相變らず募集して居るのであるが、然し兎に角募集する前から又募集した後でも、兵の扱が大變に違ふ。元は兵隊になるものは無頼の徒のみであつた。それ



が爲に支那の諺に、良い鐵は釘に使はぬ、良い人間は兵にならぬといふことが云はれて居る位であるから以前は兵隊といふものは最下等の無賴漢を使ふといふことになつて居たのである。處が今度袁世凱が訓練した以後の兵は、募集する時から若し出来れば多少文字の讀める者を探り、募集した後でも文字を讀ませ、教育したのであつて、從來の兵とは餘程兵の種類が違つて良くなつて來た。これと同時に支那の當局が考へ出したのは、だんだん外國の士官ばかりを備つて居る譯にもいかぬから、先づ外國の士官を備つて兵學校を作り、そこから外國の士官學校に留學生を出し、それに將來兵隊の訓練をさせやうと考へ出して、それが爲に日本などに非常に多數の武官の留學生が出來た譯である。其第一期に卒業したのは近頃石家莊といふ處で殺された吳祿貞等である。

さういふ風に澤山の留學生を主に日本に送つた。處が日本に送り若くは外國に送つた處のさういふ留學生等は、色々外國に行つて新しき教育を

留學生の訓練は、色々外國に行つて新しき教育を受ける。これは今度は途方もない清朝に取て迷惑な智識を得て歸る。それで支那の朝廷でも日本に行つた留學生は皆革命黨になると云つて居るが、それは日本に來たから革命黨になつたのではなく、兎に角日本に來た留學生の數が一番多いから、自然に數の上から革命主義の者に日本出身が多い譯である。結局外國に居ると新しい書物を読み、清朝なんかを頭に戴くことを詰らぬといふ考になり、それが革命の土臺となつた譯であるが、この土臺といふのが、前御話した通り長髮賊の亂の時に、その將卒共は已に朝廷の派遣した大將の命令を聞かない、たゞ自分等を組織した主將の恩義で以て働くといふやうになつて居つた處へ持つて行つて外國で新しい思想を得た士官が遣つて來て、兵隊の訓練——もするが、革命思想の訓練もして居た。さういふ風になつて、だん／＼と多くの革命黨を製造して居つた譯である。それが何の事もない間は兵隊は従順なもので、縱令革命思想を持つて居た處で外面に表はれる機會がない。士官等にさへ謀叛氣が無ければ

受ける。これは今度は途方もない清朝に取て迷惑な智識を得て歸る。それで支那の朝廷でも日本に行つた留學生は皆革命黨になると云つて居るが、それは日本に來たから革命黨になつたのではなく、兎に角日本に來た留學生の數が一番多いから、自然に數の上から革命主義の者に日本出身が多い譯である。結局外國に居ると新しい書物を読み、清朝なんかを頭に戴くことを詰らぬといふ考になり、それが革命の土臺となつた譯であるが、この土臺といふのが、前御話した通り長髮賊の亂の時に、その將卒共は已に朝廷の派遣した大將の命令を聞かない、たゞ自分等を組織した主將の恩義で以て働くといふやうになつて居つた處へ持つて行つて外國で新しい思想を得た士官が遣つて來て、兵隊の訓練——もするが、革命思想の訓練もして居た。さういふ風になつて、だん／＼と多くの革命黨を製造して居つた譯である。それが何の事もない間は兵隊は従順なもので、縱令革命思想を持つて居た處で外面に表はれる機會がない。士官等にさへ謀叛氣が無ければ

鎮まつてゐるのであるが、一旦士官等に謀叛氣があると、忽ちに今日の様な事變を生ずる譯である。即ち滿洲兵を中心にして、一、漢人驅使、二、義勇兵の利用、三、義勇兵の常備、尾大不振の弊生ず、四、新式兵革命思想の養成となつて來たので、段々沿革を考へて見ると、それを早く防げば防ぐ手段もあつたらうけれども、要するに大勢の推移るところ、どうしてもかうならなければならぬので、今日の時勢を作つて來たのである。今日の革命は武昌で突然に出て來て、さうして大變な騷動になつた様で、世界の耳目を驚かして居るが、その本來の原因を調べると、一向何の不思議もないことであつて、結局清朝は二百餘年間、其政策上から自然に革命思想を養成する様に自分で仕向けて來て居たのである。今日革命の騷亂が起つたからと云つて誰をも咎むべきではないのであります。

## 第二講 財政經濟上の變遷

清朝は御承知の通り滿洲の片田舎からして支那の大きな國に入つて其國の主となつた譯である。清朝が入りました時、その前後の支那本國即ち明朝の財政といふものゝ有様が、どういふ風であつたかといふことを少しく前に知つて置く必要がある。

### 明末の財政

明の滅びる大原因は矢張り財政にあつたのである。明の頃の財政といふのは色々収入の仕方が面倒になつて居る。清朝になつて歳入歳出は主に銀で勘定をしたが、明の頃は銀ばかりで勘定して居らない。米そのまゝで受けるものもある。それから馬糧等は草で以て納めるものもある。それ

から明の時には殊に通貨として本統の銀——一體銀といふものは支那では通貨とはいはれない様な性質になつて居つたが、兎に角實際通行して居つたもの、中に紙幣が大部ある。之を鈔といひます。勿論明の末年には紙幣の値段が大變下落して居つて、これは主に官の方で收税用に使ふとか、又は俸給の支拂ひに使ふといふことの他は、段々紙幣は行はれなくなつて居る。明の初めには鈔一貫文が銀一兩に當るべき定めであつたが、それが明の末年には銀三厘即ち一兩の下は錢分厘となるのであるから、銀三厘といふとつまり三百三十三分の一位になつて居る。そういふ譯であるから、これは名義上唯だ通用して居るといふだけであつて、實際通用はせぬのであるけれども、兎に角政府の収入にも、又支出にも萬曆頃まで鈔で計算して居る部分がある。實際效力のあつたのは銅錢と銀とであつて、銅錢は遠方に運ぶといふことが出来ぬので、軍費とか何とか遠方に送るものは銀を使つて居つたから、銀は歳入歳出の主な部分になつて居つた。けれども收支

ともに銀以外の者も計算してあるから、今日から見ると銀だけの歳入歳出の定額は大變に小さいものである。

萬曆の中頃に當つて戸部即ち大藏の官吏が計算して上奏したのものによつて見ると、大體銀だけの歳入歳出は四百萬兩といふことになつて居る。

それが明の末年になるに従つて大變に支出が多くなつて財政が支へ切れなくなつた。その主な原因は日本の朝鮮征伐に對して出兵の軍費も其一になつて居る。萬曆年間に方々を征伐をした時の費用の中の一番大きい項目は、日本からの朝鮮征伐に對抗する軍費であつた。それが七年間繼續して居つて、正味の軍費として出したのは五百八十三萬兩餘である。その他色々の附屬の費用が三百萬兩程あつて、八百八十餘萬兩の支出をして居る。かういふことは随分明の財政に影響したものであつて、これが明が萬曆以後國力の弱つた原因になつて居る。

それから以來滿洲が盛んになつて來て、滿洲征伐が一大問題になつた。

之を遼東征伐と稱して居るが、その遼東征伐の軍費が大變にかゝることになつたのである。從來の歳出入は四百萬兩に過ぎないのであるが、明が滅びる九年程前即ち崇禎八年の頃には歳出千二三百萬兩程になつて居る。勿論その歳出の増加した丈は税を増して支出して居る。處がそれが明の滅びる實際には段々に増して千六百七十萬兩迄に増して居る。かういふ風に銀の支出が定額よりも四倍以上に増加して居るのであるから、止むなく重税を賦課した結果方々に内亂が起り、其結果滿洲に亡ぼされる前に一揆騒動の爲に亡ぼされたのである。

### 清朝の初め

明の滅亡の原因は斯の如く財政上にあるのであるが、それに引つゞいて直ちに清朝が滿洲から來て明に代つた。清朝に取つて大變に有利であることは、明の土地に入ると同時に、明の方の財政として自分即ち滿洲を征伐

して居つた軍費が全く要らなくなつて仕舞つた。それで詰り萬曆から崇禎年間まで明が賦課して居た總ての重税を免除することになつた。然し清朝が明を取つて這入つた初めには支那十八省皆手に入つた譯ではないから、歳入に於ても矢張り明の末年程には這入らぬ。それで始めは年々歳入不足を告げて居つた。然し滿洲といふ様な片田舎の小さな國から、まるで野蠻人の様な人間が支那の中原の大きな帝王になつたのであるから、結局田舎の水呑百姓が都へ急に出て來て何百萬兩といふ身代になつた様な譯であつて、費用がかゝると云ふものゝ、明の時に使つた費用とは大變な差である。明の末年には——いつでも國の亡びる時には斯うであるが——帝室費が大變にかゝつて居つた。その帝室費が清朝の様な田舎者が這入ると、そうは要らない。勿論清朝でも又段々注意して、明の様に帝室費のからぬ様にした。それ等が段々財政の豊になる原因であつて、其事について康熙帝、即ち北京に這入つてから二代目の天子が明の時の費用のかゝり

様と清朝になつてから殊に自分の代になつてから節儉して費用のかゝらぬ様になつた時の計算とを比較して居る。

### 宮廷の節儉

明の時には宮廷の費用が大變にかゝつて居つて、宮中費用として九十六萬兩の銀を費つて居つたものを、清の康熙帝になつてからそれは悉く軍隊の費用に當て、仕舞つた。それから明でも清でもそうであるが支那の制度として光祿寺といふ役所があつて、それは宮中の用度を司つて居る、工部と云ふものがあり、是は主に建築營造のことを掌つて居る。それが随分多額の費用を使つたものであつて、明の時に其光祿寺から宮中に送つて來る費用は毎年二十四萬餘兩であつた。それが康熙帝の時には三萬兩を送れば用を辨ずる様になつた。其外薪炭やら營繕費やらすべて節儉をして、光祿寺の費用は明朝の十分の九を省き、工部の費用も二三十萬兩まで減じた

のを更に十五萬兩まで節減したのである。それで宮中に使つて居る人も勿論大變減らして仕舞つた。何でも康熙帝の時に明朝からして宮中に使はれて居つた宦官の老人が残つて居つて、それが明の時の模様を話したことに依ると——無論誇張の點もあらうが——明の時に宮中で用ふる麝脂せじや白粉せうほんの費用は年々四十萬兩もかゝつたのを、清の世祖が北京に入ると皆除いてしまつた。又宮中に使はれて居つた女の數は明代に九千人許りであつた、それから宦官の數が十萬人程居つた。そこでそれだけの多くの人の賄ひをする時などは、どうかすると配分洩れがあつて、腹を減らして餓死した者があるといふことであつた——これ等は誇張の言であらうが——兎に角その宦官の話に依ると、さういふ有様であつた。それで康熙帝が云ふには、今は宮中には僅かに男女共に四五百人しか使つて居らぬ。それであるから明の時の光祿寺の費用は六七十萬兩であつたのを、康熙帝の時には四五萬兩に減じた。それからして工部の方では年々百萬兩程費つて居

つたのが康熙帝の時には拾五萬兩に減じて居る。かういふ風に大變に宮中にては節儉を行つたのである。つまり田舎者が大きな身代に這入つた様なもので、兎に角今迄使つて居た費用が要らなくなつてしまつた。そこで其儉約の結果、康熙帝の末年には、國庫に多額の剩餘金を生じたのである。この剩餘金に就ても色々書いた記録に違ふ處が有つて——是が支那人の言ふ數であるから随分違ふ時にはほとんど違ふのである——魏源の説に依れば康熙帝は非常に節儉したが、其の末年に八百萬兩しか残らなかつたと言つて居るが、或る説には康熙四十八年には五千餘萬兩の國庫剩餘金があつたと云ふ。八百萬兩と五千萬兩、大變な違ひであるが、此は必らずしも兩方とも誤りではあるまい。といふは計算の仕方によつて、中央だけの地方のを併せたのなどで違ふ丈の事である。兎に角剩餘金が段々出來て來たと云ふことは事實である。

斯う云ふことからして段々儉約して、さうして人民の負擔を軽くした。

殊に清朝は外から這入つて來て、さうして支那の國を取つたのであるから、人民の機嫌をとることに非常に努めた。それで負擔を軽くすることを段々骨折る様になつた。

### 壯丁税の廢止

其の負擔を軽くする手段としては、先づ壯丁税を廢すると云ふことを行つた。元來支那には明代から人頭税——ではないが壯丁税といふものがあつた。男の子は十六になつてから六十になる迄の間は壯丁の税を課せられたのである。それは其壯丁税は地方に依つて廉い處と高い處と大變な相違があつた。廉い處は僅かに銀一分何厘と云ふのであるから、一兩の百分の十幾つか位な處もあつたのである。それから多い處は一人で以て四兩ももつと其の上も取られて居る處もあつた。是は明末の色々争亂の結果、さう云ふ不平均を來したのであるが、兎に角平均は一人に付て二錢即

ち一兩の十分の二であつて、今の日本等の金で云ふと二十五六錢位のものになりませう。さう云ふ壯丁税を取られて居つたのを、乾隆五年以後には之を廢して仕舞つて、さうしてそれを地租の中に繰込んで地租と一所に取ることになつた。地租と一所に繰込んで取るのであるから全く廢した譯ではないが、それならばどうして負擔が軽くなるかと云ふと、壯丁税を取ると五年に一回宛人口を調査して、其間の増加數を調べて壯丁税を課するのである。處が乾隆五年以後其の五年一回の人口調査を廢して仕舞つた。それが爲に負擔が軽くなつた。さうして地租に這入ると地租の額が年々一定して居つて、増加することがないから、それだけ軽くなる譯である。さう云ふ風にして負擔を軽くした。

### 雍正の財政策

負擔を軽くした方はさう云ふ風であるが、一方に國庫の收入は又これを

大いに殖すことを考へて居る。康熙帝の次は雍正帝で、治世は僅か十三年であるが、其財政上に於ける功績は尠なくなつた。禪學者であるが、極めて嚴肅の人であつて、非常に探偵等を澤山に使つた人である。この人の逸話として斯う云ふ事などもある。或大臣が北京に居つて自分の宿に居る時にその友人と骨牌遊びをして居つた。さうすると其の遊んで居る間に何時の間にか骨牌が一枚なくなつた。それから三四日してから天子に謁見をすると、天子が其大臣に問はれるには、汝は何日何時に何をして居つたかと、其時に其の大臣は幸にして正直に答へて、實は不都合では御座います、骨牌遊びを致して居りましたと云つた。雍正帝は大に悦ばれて、君を欺かない頼もしい臣であると云つて、非常に其正直を褒め、さうして先夜無くなつた處の骨牌を一枚出して見せられたと云ふ話である。是は結局探偵を使つてさういふ事をしたのである。如斯に非常に探偵を使ふことの名人であつた、それで此人が非常に財政の取締を嚴しく行つた。在位僅に十

三年位の間であつたが、この天子の爲に財政が大變に豊かになつた。勿論さう云ふ天子のことであるから、多くの兄弟等とは大變に仲が悪くて、兄を刑罰に處したり、随分酷いことをして居る、併し兎に角政治家としては偉い人であつた。

### 耗羨の歸公

此雍正帝が財政整理をして収入が殖えたのは、一つは地租の附加税に耗羨といふものがあつたのを政府の収入にした爲である。此の耗羨と云ふのは税を人民の方からして政府へ納める時に、それが何か不慮の災難があつてその税が途中減るやうなことがあると、政府の収入に影響を來すから、その保険料の様なものを附加するのである。その附加税が地方に依つて大變に差がある。低い處は浙江の杭州邊りでは一兩にて四分を加へる、即ち百分の四の附加である。多い處は二錢即ち二割の附加である。さう云

ふものが元來あつたのであるが、それは地方の收税を取扱ふ處の官廳の雜収入に使つたのである。(實はこれは支那の官吏のことであるから、無論これ等のものを着腹して居つたのである。)雍正帝の時にそれは一切着腹相成らぬと云ふ嚴命を下した。それであるから平均一割乃至一割二三分迄の租税の増收入を來した譯である。勿論雍正帝もその代償として官吏に養廉銀といふ手當を大に與へた。けれどもそれだからと言つて官吏の着腹は全く止で仕舞つたといふ譯ではない。是が爲めに官吏の餘分の収入が減じたからと言つても、又他の方法でどうにでも出来るので、詰り人民がそれだけ多く税を取られることになるのであるが、兎に角さう云ふやうな方法で収入を殖やしたのである。

### 捐例と鹽課

それから元來支那では時々何か事がある毎に捐官といつて官爵を賣る



ことがあつた。何百兩出したものには知縣の官をやるとか云ふ風なことを、何か事變のあつた時毎に特別に行つたのである。所が雍正帝の時になつてどうせ官と言つても候補官のことであつて、實際に役人にするかしないか當にならぬものであるから、一層毎年賣出したらば宜しいと云ふので、捐官と云ふことを年々常例とするやうになつた。其高ばかりで一年三百万兩の収入を増したと云ふことである。

それから國が太平になつて人口が段々殖えるに随つて、鹽を澤山食べるやうになつて、鹽の消費が大變に殖えた。それで清朝の初めから見ると、乾隆頃には一ケ年に三百餘萬兩位増して居る。

## 關 稅

又支那では自分の領域内に關がある。關と言つても日本の徳川時代の時のやうに人間の資格などを取調べるのではない、貨物の通過税を取るの

ある。それが従來は關稅は其關の費用を支辨する位の収入しかなかつたのであるが、太平の結果、戦争がない爲めに、段々貨物を方々へ運搬するものが殖えて来るから、それで雍正、乾隆の頃には其關稅が多く這入るやうになつて來た。是等のことが段々原因を爲して來て雍正の末年に大變な収入を増しました。

一體當時の歳入はどれ位かと云ふと、大體定額として四千五六百萬兩であるが、年々に歳入に剩餘が出来て來て、雍正帝の末年には國庫の剩餘金が六千餘萬兩あつた。其時に色々蒙古地方又新疆地方などを征伐することがあつて、此の剩餘金を半分程使つたので、乾隆の初には二千四百萬兩位しなくなつた。

## 乾隆朝の全盛

乾隆帝の時代は長い治世で甲子一と周り、即ち六十年間續いて居るが、其

間に大征伐が澤山ある。それから前回の講演で言つたやうに、其征伐の時の金の使ひ様は清朝の初めとは違つて、非常に贅澤に使ふやうになつた。將校の着腹することもある、戦争が濟んでから賞與が多くなつたと云ふことを御話したが、さう云ふことで金の使ひ方が大きい。それで乾隆帝の時に彼の新疆の地方が支那の版圖に歸するやうになり、其征伐の爲めに三千餘萬兩を使つて居る。併しそれで兎跡に残つた國庫の剩餘金が矢張り七千餘萬兩であつた。乾隆四十一年頃には彼の四川の山奥の方、楊子江の上流の險阻な大金沙江、小金沙江の二つの河の所で蠻賊が起つたので、其の蠻賊の叛亂を征伐する爲めに兵を用ゐたのである、其時に七千餘萬兩を使つて居る。併しそれだけ使つてもまだ六千餘萬兩の剩餘金があつたと同年の上諭に書いてある。それから乾隆四十六年になつては七千八百餘萬兩の剩餘金がある。乾隆年間には支那中の地租を全免したことが四回ある。地租の全免と云ふものも随分不思議のことであるけれども、兎に角中央政

府に入るだけの者、詰り賦役全書といふ中央政府の帳面に附いてある額だけの地租は免除した。それは一ヶ年に三千五百萬兩の收入があるのを、それを四回程免除して居る。それからして支那では南方の七省から北京へ年々米を送るのであるが、其米を送るのを二回免除して居る。斯う云ふことは餘程變なことであつて、勿論中央政府に這入る地租だけは免除されるが、是は實際議論のあつたことで、此の免除によつて實際の恩惠は人民に及ぶかと云ふと、名義の善い程人民に及んで居らぬ。官吏と云ふものは政府に納める税を取る時に、色々それに附け増をしてそれで生活をして居る。全く地租を免除されると云ふと、一體本税が無くて附加税がある筈がないから、此免税の爲めに官吏の收入が無くなる筈であるけれども、事實はさうではない。政府の收入としてはそれだけは免除されてあるが、又官吏の方では何とかかとか云ふ名義で取つて居つて、其附加税は相應な多額に上つて居るから、天子が免税をしたと云ふ美名のあるほど、人民はそれ程恩惠を

受けて居らぬ。けれども兎に角免除は免除に相違無いから、國庫の収入はそれだけ減じたのである。

それからして乾隆帝はさういふ風に國庫の剩餘金もあり、支那の全盛の時に生れたから盛に巡幸をやつた。江南の景色が佳いと云ふので、皇太后に見物させて孝行をするとかいふので、北京からはるく江南即ち南京、蘇州、杭州の方へ遊びに行つた。六回程一生の間に遊びに行つた。さうすると通過された地方の租税は免除してやつた。それから歩くに就ては隨分金が要るのである。そこで是等支那中の地租を免除したと云ふこと、南方七省からの漕糧を免除したこと、及び江南巡幸六回、是等の出入の費用を總計すると貳億萬兩程の収入を減じて居る譯である。それであるから隨分収入に於ては思ひ切つて減ずることも行つて見た。行つて見たけれども乾隆五十一年の國庫の剩餘金は矢張り七千萬兩である。さう云ふ風になつて居つて兎に角乾隆一代と云ふものは大變に剩餘金が澤山あつた

のである。

是が清朝の太平を極め、全盛を極めた時であつて、此結果として或る時に乾隆年間に武官の給料を増加したことがある。其時には勿論兵數をも増加して居るが、其外一體に武官なり、兵卒の給料を増加した結果、一ヶ年に參百萬兩の支出増加を來した。是は其時からして異論があつた。乾隆の頃に有名な大臣の阿桂と云ふ人は其時に地方官であつたが、それが上奏をして參百萬兩の支出増加をして武官の窮乏を救ふと云ふことは結構であるが、是が常例になると、年々參百萬兩を餘分に出さなければならぬ。一時のことならば兎も角も、是が常例になると將來の財政上好ましからぬことである。それで國の収入は大抵極まりがあつて、さう特別な増收があるものでない、それに急に三百萬兩を増すと云ふことはどうかと云ふことを申出た。所が乾隆帝は年々収入増加が五百萬兩程あつたから、まだ參百萬兩を増俸したつて大丈夫だと云ふので、武官兵卒の俸給増加を斷行した。

此處までは兎に角清朝の財政が國の初めから段々殖えて居る。それで凡そ百五十年ばかりの間は國庫の歳出入は殖える一方であつて、詰り其爲めに清朝が全盛の形を表はしたのである。支那の歴史では是は何朝でも同様肝腎なことであるが、人民の上に臨む官吏などは何百年來同じやうな仕來りをして居るのであつて、特別に非常に善い政治を行つて其爲めに人民が助かると云ふ譯でもなし、又特別な惡い政治を行つたから困ると云ふことでないので、兎に角支那では戦争さへ年々續かず人口は段々殖えて行き、それで支那のやうな廣い國で未開墾地が段々開墾されて行くやうになりさへすれば、國庫収入が殖え、國庫収入が殖えれば朝廷では贅澤も出來、文學も起せば建築も出來るのである。それで以て太平の飾りが出來るのである。支那では何の朝でも中頃四五代目の時に於て、全盛を極め太平を謳歌して居るのはさう云ふ結果でなるのであつて、特別其天子が豪い譯でもないのである。

## 衰 運

兎に角さう云ふ譯で、清朝も百四五十年の間は段々全盛に向つて來たが、それから段々衰運に向つたのである。其衰運に向つた原因を歴史家が調べて居る。此衰運に向つた譯は分り憎くないのであつて、段々調べると、一つはやはり歳出が増加して來た爲であることが分る。詰り乾隆の末年から道光の末年までの六十年位の間に、歳出増加の爲に清朝は大變な衰運に向つて來て居る。

## 皇族の増加

其の歳出増加の原因は妙なもので、一つは皇族が殖えた結果である。支那の皇族は随分數が多いのであつて、滿洲に起つた太祖の伯叔父の血統から出たものは皆皇族になつて居る、之を宗室といふ。それが十年に一逼宛

系圖調べをして、其系圖を奉天と北京の宮殿に納めたのであつて、系圖ばかりでも一の大きな倉庫に一パイになつて仕舞ふ位ある。それから太祖の祖父の兄弟から分れたものは准皇族となる、之を覺羅といふ。而して宗室は黄帶子ホウタイズといつて黄色の帯を締める特權を持つて居り、覺羅は紅帶子ホンタイズといつて赤い帯を締める特權を持つて居る。此の皇族の數は實に大變なものである。清朝が北京に乗り込む迄に皇族の數が二千人であつた。處が道光の末年になつてそれを調べて見ると皇族の數が三萬餘人あつた。是は支那の制度として、清朝のみならず明の時でも實はさうであつた。明の末年には皇族の數は十萬人からあつたと云ふ位である。さう云ふ風に大變に皇族が殖えて來るのであるから、今日にあつて計算したならば皇族の數は實に大變な數であらうと思ふ。それで宗室の祿と云ふものは大變に殖えて居る。詰り帝室費が大變に殖えて來て居る。尤も支那の宗室と云ふものは日本の皇族方の様にその手當が手厚いかと云ふとさうではない。隨

分北京などでは宗室で、一ヶ月五元か七元の報酬で官話の出張教授などをしてくれるのが珍らしくないが、兎に角皇族の數が多い爲に皇室費が大變に増加して居る、それが一つの原因である。

### 地租の未進

今一つは段々地租の未進の殖えることである。此地租の未進の殖えることは大變なものであつて、是も清朝の所謂仁政の結果である。支那では十年位宛に一度地租の未進を調べて見る。それで到底取れる見込のないものは十年に一逼位地租の帳消をやつて仕舞ふ。さう云ふ慣例があるから、地方で大變な變災があつたとか云ふ場合には、斯う云ふ事情で地租が納められぬと云ふことを申し出でそれを引延して居る。さうして十年程すると時効が來てそれが帳消に成つて仕舞ふ。さう云ふ都合好き仁政があるから段々未進が多くなる。さう云ふことで康熙から雍正までの間には

一ヶ年に六拾萬兩位宛の未進があつたのが、段々乾隆から以後嘉慶道光と云ふ様な時代に成ると、一ヶ年の未進額が貳百萬兩位に殖えて居る。それが四五年間経つと千萬兩位未進が出来る。帳面の上では取れるべき筈の税額があるが實際に収入がさう云ふ風に段々減つて居る。是は勿論清朝が自慢な仁政から来る正當の結果であつて、即ち天災地變の地方は當然未進を生じ、新開地は届け出でない。清朝では乾隆年間に作つた賦役全書があつて、今日でもその臺帳によつて、租税を徴收して居る。それだからたとへば或る川の兩岸に某縣某縣とあるとする。其川が洪水に依つて兩縣の面積が變化して一方は増加し、一方は減少しても、兩縣の地租は従前の通りに賦課されるのであつて、従つて面積が減少した地方は未進が多くなり、新らしく生じたる面積は無税の儘で通して居る。斯う云ふ様なことが矢張り、収入を減ずる一つの原因であります。

其の他にも収入の減少の原因になるべきことがあり、又ないのが

ある。それは旗本たる八旗の人口が段々殖えて行く、それが殖えれば費用が段々多くなりさうなものだが、實際は殖えない。それは矢張り我が徳川時代の旗本と同じ様なものであつて、八旗の全體の人間の俸給は決して居つて、是はまゝ支出増加の原因にはならぬと云ふことを云つて居る。それで段々収入減少を來した結果を見ると、道光の末年、即ち道光二十五年から二十九年頃迄の歳入歳出では、歳入の定額としては四千五百拾七萬兩であるが、道光二十五年には四千六拾壹萬兩となり、道光の二十九年には參千七百一萬兩となつて大變に収入の減少を來して居る。勿論収入が減少すると支出も共に減少しては居るが、兎に角從來のとは大變に減つて居る。詰りさう云ふことから兵隊の給料を當り前に拂ふべき處を七割とか八割しか拂はぬと云ふことで済した。一體支那では政府が拂ひ渡すべき金でも、其の全額を拂ふことは餘程珍らしいのであつて、一圓のものを拂ふには大抵は八十錢位しか拂はないと云ふ様な流義である。それだから全額支拂

ふべきものは、文書に全額支拂と斷つて居る位である。それは一つは段々収入の減少の結果としてさう云ふことをしなければ納まりが付かぬ様になつたのである。以上は政府の収入支出の上の計算であつて、財政上の原因と云ふべき者である。

### 物價の騰貴

その他に又もう一つ一般經濟上の原因と云ふものがある。それも政府の財政には大變な打撃を與へたのである。それは二百六十餘年間に段々と物價の騰貴したことである。此の物價の騰貴を調べたのは馮桂芬と云ふ人で、今から三四十年位前に有名な人である。長髮賊の亂の時に、上海の紳董から汽船を會國藩の安慶の本營に送つて援兵を請ふた時に、其の乞援の書を書いたので大に國藩に推稱され、爾來東南の大局、公が一書に在りといはれた人である。此人は支那の改革論者の先鋒と云つてよい人であつ

て、今日日本に来て居る康有爲が最初に立てた支那改革意見は主に此の人の説を取つたのである。此人は西洋數學に長じた人であつて、大變良い頭を持つた人であつた。一甲及第の進士で後には李鴻章の幕中に居つて李鴻章の參謀官の様になつて居る。此の人が色々物價の騰貴に就て調べたことがある。その一例だけを舉げて申しますと、康熙年間には聖祖皇帝が大に西洋の實學が好きであつて、西洋の數學等を基礎にして數理精蘊といふ本を作つて居るが、その本の數字の問題の中に物の値段が書いてある。此の値段は其數學の本を作つた當時の値段と大差がないものと考へて見ると仲々興味がある。例へば春秋二季に孔子の祭をするのに羊を祭の犠牲に使ふのであるが、その羊の一疋の價は康熙帝の時には一錢八分即ち一兩の百分の十八である、日本の金にすれば二十四五錢にもなりませう。さう云ふ相場であつたのが、此の人の時代になつて丁度六倍の高價に上つて居るといふやうな例がある。それから又此人は韓桂給といふ舊家に古い帳

面があつたのを見たことがある。それは順治年間清朝が始めて北京に這入つた時代の帳面である。それに依つて見ると當時大工左官等の手間賃は大抵一日に二十八文であつた、さうして小兒がその半額と云ふことであつた。處が道光の初年、順治から約百七十八年経つた時に大工の手間賃が八十四文になつて居る、一寸三倍の騰貴を來して居る。それから後咸豐同治頃即ち此の人の時代迄の間に三四年経過して居るが、その頃の手間賃は二百二十文になつて居る。それで約清朝の初めからして八倍の高價になつて居る。斯う云ふことが大變に政府の財政の窺乏を來す原因である。

### 銀價の變化

それからもう一つ大變に支那の全體の經濟に影響をしたのは、銀の値段の變化である。銀の値段は清朝の初めには、一兩を銅錢どれ位に換へたか

と云ふと、七八百文に換へて居つた。それで馮桂芬の云ふのには、今の銀の値段の十分の四か五に當る、即ち順治の時から咸豐同治の頃には銀の値段が倍になつて居る。是が清朝の財政に取つて大變な痛手を負はせることになつて居る。其他兵隊の給料等は清朝の初めには一日五分、五分と云ふと一兩の二十分の一であつて、日本の金で云ふと六錢か七錢位のものであつた。それが長髮賊の起つた後に義勇兵が起り、是が常備兵の形になつた。其時の兵士の給料は一日二錢になつて居る。二錢と云ふと我が國の二十六七錢に當るのである、斯の如く増加して居る。さう云ふことからして何か大工事があると大變に費用がかゝる。清朝の初め、黄河が氾濫した時に、一回の費用に百萬兩位使つたものである。それが段々後になつて道光、咸豐の頃になつてからは、一回黄河が氾濫すると千萬兩の工費を使はなければならぬことになつて居る。さう云ふ風に大變費用が多くかゝることになつて居つて、さうして政府の収入は餘り殖えない。



物價の騰貴から清朝の財政が窮乏を告げることは明白であるが、銀の値段が上るのが、どうして清朝の財政に困難を與へるかと云ふと、これも制度の上からさう云ふことが出来て來るのである。支那ではたとへば地租を人民から取り立てる時に、皆銀で取り立てるのでない、細かいのは銅錢で取り立て、それを銀に取り換へて北京に送ることになつて居る。それで詰り、銀の廉い時に定めた銀と銅との兩替相場がある、詰り銀一兩納める時に（勿論其時分から錢で納めるものには割増をしてあるが）銀一兩に就て二千文の相場を取つて居つたとする。所が段々銀が高くなつて銅錢が下る。銅錢が二千文のものが三千文でなければ銀一兩の値打がなくなる。さうすると政府の収入が大變に減ずる譯になつて來る。それが詰り今の清朝の財政に大變な打撃を與へた譯である。

此銀の値段の高くなつた原因はそれも色々あつて、重もに印度から阿片を盛に輸入して銀は外國に流出し、全國の憂國の士は此阿片の輸入を禁止

せんとし、其結果阿片戦争を惹起し、又此爲めに多大の軍費を費した。是も大なる原因になつて居る。それから阿片戦争以前、即ち開港以前の清國の外國貿易なるものが年々外國に正貨を流出する。これは日本の長崎貿易なども同様であつた。即ち片貿易になつて居るので、それが爲に支那本國では銀の缺乏を告げて、銀の價が段々上つて來た。それで以て道光咸豐頃までの清朝の財政は、無事太平であつても窮乏すべき勢になつて居つた。

### 軍費の増加

其處へ最近の時勢になつて來た、すると前言つたやうに第一軍費が大變に掛かる。それは前にも言ふ通り、從來の常備軍たる八旗、各省の綠營兵が役に立たぬので、八旗、綠營兵が昔のやうに給料を貰つて居る外に、各省の義勇兵が常備軍と同様になつた。それ等のものにも給料を拂ふと云ふことになつて來た。それで長髮賊を平定する時から軍費に非常に窮した結果

として釐金税を起した。

### 釐金税

是は内地の通過税である。内地各省の關門を通過する貨物に通過税を徴収する。それが段々殖えて、近年では千萬兩から二千萬兩近い収入を得るやうになつた。初めは此税は勿論酷く悪税であると云ふことを支那政府も承知して居るから、戦争が止めば廢止すると云ふ公言をして居つた位である。さて戦争が止んでも義勇兵を解散する譯に行かぬから、通過税を廢止する譯に行かぬ。それで兵費が大變な額になつて來た。それから尙ほ極く最近の時勢になつて、明治二十七八年以後支那の改革時代に向ふと三通りの常備軍が出來た。常備である舊式兵、義勇兵と其外に新軍、此新軍は今では二十個師團ばかり名義上出來て居る。此の新軍にも更に又新しい費用を要する。勿論其間に綠營などの兵も減じて居る、義勇兵も段々

減じも居るが、兎に角最初企てる時には從來のものがあつた上に、更に加へ加へて、本膳の外に二の膳に三の膳を附けると云ふ制度になつて居る。

### 新舊制度の重複

それが殊に兵に於てのみならず、總ての官制に於てさう云ふ風であつて、近年まで段々費用が殖えて來て居つた。たとへば昔から國子監があつて名義上大學と云ふやうなものになつて、それが從來の通りに政府から經費を支給されて居る。それで新たに北京大學堂を造るに就ては、何か外のもので収入を増した分、大學堂の費用を維持すると云ふ風になる。從來あるものゝ外に段々新しい機關が殖えたと殖え次第に段々費用が増して來るのである。是が亦歳出の増加を來したのである。それで道光の末年には歳出入四千五百萬兩、實際は三千七百萬兩の歳出入になつて居つたが、日清戦争の當時には支那の全體の歳出入は倍位になつて居つて、八千九

百萬兩となつた。勿論一つは外國との貿易で海關税が殖えた爲に千萬兩以上の収入を得、それから鹽の税が殖えた爲めに段々収入も殖えては居るが、兎に角道光の末年から今より十八九年前迄に倍位に殖えて居る。それから最近の歳出入を調べて見ると、近頃ではそれが更に非常に増加して、今日の歳出入は實に三億萬兩位に増加して來て居る。さう云ふ譯であるから詰り非常に財政の膨脹を來して居る。尤も日本などでも財政の膨脹を來して居るが、その代り維新前とは、全く財政の方式を異にして居る。それでも近頃では財政が苦しいので、政府に於ても大分儉約する様になつて來たが、まだそれでも税制の整理を要するといふ議論がある。支那では四千萬百萬兩と云ふものがそれが八千何百萬兩と云ふものになり、今日では三億萬兩にまで上つて、非常に財政の膨脹を來して居るが、依然として昔のままの財政の方式で、少しも財政整理を行はない、従つて新事業を起す毎に財政に窮する。

又今一つ注意すべきことは明の末でも同様であるが、國の末路に近づくに従つて起る所の支那の財政の一の現象は、國の初め、即ちある朝廷の起る始めには、地方の歳出入の割合に中央の財政が少なくて濟んだのが、段々朝廷の末路になるに従つて中央の財政の膨脹を來し、中央の財政の中でも殊に帝室費の膨脹を來すと云ふことである。それが一般支那歴史に現はれる定つた現象である。明の時定額の収入が四百萬兩であつたのが千六百七十萬兩に迄増加して居る。其上に隨分帝室費を思ひ切て使ふのである。例へば明の末年萬曆二十七年に皇太子の結婚のあつた時に、朝廷で二千四百萬兩の金が要ると云ふことであつた。處が其時にはどうして戸部即ち大藏省を倒に振つても、それだけ出よう筈がない。出ないならば一つ各省の貯金を嚴重に調べよとの命令であつた。成程支那では明朝以來各省の貯金が何十萬兩かづゝある、併しそれは崩さない制度になつて居るのである。その各省の貯金をせしめて、さうして皇太子の結婚を行つたのである。

其後中央の膨脹した結果として、帝室の方は明末にも随分金を持つて居た。それで滿洲征伐軍が敗北した、急に援兵を出さねばならぬ、急に金がかかるとなると戸部にも其の金がない、そこで内帑即ち御手元金下附と云ふことになつて、何十萬兩かの金を帝室から出して貰つて軍隊の費用を補助して居ることがある。さう云ふ風で支那では國の末年には帝室でも大變な財力を握つて居るのであつて、今日の清朝でもその傾がある。

### 帝室の資産

今の帝室はどの位の臍繰金を持つて居るかそれは能く分らぬけれども、何日かの新聞に依ると、袁世凱が皇室の財政を調べた處が金銀が何萬兩かあつたとか云つて居るが、あれは有り得べきことであると思ふ。どうしてさう云ふ風に帝室の御手元金が豊かになるかと云ふと、これは常例の収入の他に帝室には色々な収入がある。詰り帝室が官吏から賄賂を取るの

ある。一體賄賂と云ふものは官吏が人民から取るのであるが、支那では帝室が御先きになつて賄賂をとる。何か地方官の大きな官吏になると勿論定つて賄賂を納める。殊に前の西太后の時などには、御機嫌を損はない様に年々進物を献上する。勿論其の進物と云ふのは金である。それから知縣等が北京に来て拜謁を仰せ付けられる、即ち召見を賜ふといふ、それが官吏の進級の資格の一つになつて吏部の記録に載る。併し唯では拜謁が出来ないので、この拜謁には料金を要する。さう云ふ風にして官吏より直接に納める賄賂は莫大なものであつて、さう云ふことからして、朝廷は政府の収入に全く關係のない臍繰金を澤山持つて居る。それであるから今の皇太后が何千萬の金を持つて居つても別に不思議でも何でもない。これが帝室費の収入の一つの膨脹である。

それから中央政府の費用も矢張り近年大變に殖えて居る。明治二十六年頃に八千九百萬兩程の財政であつた時には、その中五千三百萬兩位迄は

中央政府の會計に這入るものであつた。その他の三千六百萬兩と云ふものが地方の政府に這入ることになつて居つた。處が最近になつて三億萬兩の歳出入になつても、地方の財政に於ては八千九百萬兩の時代と大差はない。それに中央政府の經費は常に膨脹して財政の大部分を使つて居る。それに支那では殊に三十三年の北清事變以來年々中央集權に傾いて、隨つて中央財政の膨脹を來して居る。

### 財政と國運

斯う云ふ風に財政が中央にばかり膨脹し、尙又其帝室の收入が大變に膨脹して來ると云ふ時には、何日でもそれに續いて來るものは何かと云ふと、詰り其の朝廷の滅亡である。それで此度の事件もどういふ風に變化して行くか、財政上からも兵路上からも豫言が出來にくいけれども、兎に角今日の處、税制やら幣制やらすべて整理をし、財政上の方式を根本より大改革を

するに非ざれば、縱令此度朝廷が兵力を以て革命黨を壓服しても、今の朝廷は遠からず財政の爲に二進も三進も往かなくなつて、御叩頭オウダウをしてしまはなければならぬことになる。それは日本でも同じである。嘗て勝伯爵が、徳川政府が倒れたのは、あれは薩長が倒したのではなく、どうしても徳川幕府の末年には財政が持たなくなつて居つたから、自然に倒れなければならぬ様になつて居つたのであると云ふことを云はれたさうである。これは勝伯爵の如き徳川の末路に居つて、殊に財政の點に注意した人の言として、大なる教訓を遺したものと思ひます。今日の支那も矢張り其點に於て徳川幕府と同じ様な運命になつて居つて、どうしても財政に於て持ち切れなくなつて居るのであります。

さて今日の形勢では、清朝と云ふものももう一週間位はまだ將來がありそうでありますから、この次には又その將來の如何様であるかの模様に依つて、何か思ひついたことを御話いたしませう。

### 第三講 上 思想上の變遷

第一回の講演に於ては兵力の上から見、第二回の講演に於ては財力の上から見て、共に過去より現在に次第に衰運に向ひつゝある事を述べましたが、今日は少し思想の上から、過去より現在に至る變遷に就て述べて見やうと思ひます。さうして其終りに少しばかり將來みたやうなことを申す考へであります。思想上に於きましても矢張り近年の傾向は清朝に取つて不利益になつて來て居ります。

此思想に關係しましたことは、假りに是を二の項目に分け、一をば種族觀念の勃興と致します。今一つは尊孔思想の變遷であります。成る可く今回で此講演を切上て仕舞はうと思ふために至極簡單に話を致しますから、或は充分に其意を盡さない所があるか知れませぬ、大體の要點だけは遺さ

ないつもりであります。

### 種族觀念の勃興

種族觀念の勃興と云ふことに就ては、清朝時代に於て支那が世界の上に於る地位に大變に變化を來したことが大に與つて力があります。支那は御承知の通り、自尊自大の國であつて、自國を中華又は中國と稱し、如何なる國に對しても他の國は皆蠻夷戎狄と呼び、自分の國だけは中國、中國の人間は本當の人間、外の國の人間は蠻夷で、禽獸と相距ること遠からざるもの、如く考へて居つた。それ故自分の國を國と考へて居らぬ。支那で國と云ふ語は春秋戰國時代の列國、又は漢以後でも郡國と並稱して、諸侯の領土を指す類であつて、自國內にて幾多は分れて居る國を指し、支那全體は是を天下と考へて居つて國とは考へては居らぬ。天下と云ふのは天の下にある土地は皆支那である。さうして自分は其真中に居つて、外の國は其裾に

ひつ附いて居るものである位に考へて居つて、外國の事を四裔など、申します。昔からさう云ふ考で、最近に至るまで、其考は取れなかつた。其考の漸く變りかけたのは僅に七八十年此方のことである。

### 英使 マカートニー

乾隆の末年即ち今から凡百十年程前に、英國から使者が來たことがある。それはロード、マカートニーで國王から重大な使命を受け、支那と貿易を開くことを要求する爲に來たのである。此使者は從來支那に來た外國人の中では、最も見識を取つて支那人に下らなかつた人である。其處で其人が乾隆帝に謁見する時などには、儀式の争があつて、支那人は何でも外國から來た者は皆夷狄の國から朝貢に來た者に過ぎないのであるから、英國から來た使者でも天子に對しては支那の臣民と同様の禮を取らなければならぬ。たとへば、謁見の際に三跪九叩禮と云つて、天子に對しては三度跪き九

度頭を下に着けると云ふやうな途方もない尊敬の禮を採るのである。處がロード、マカートニーは儼然として之を跳ね付けて、そんな不禮なことはいない、自分は英國の使者である、支那の臣民ではない、随つて支那の皇帝に對して臣民同様の敬禮をする理由がない。いろ／＼争つた結果、マカートニーは自分は英國王の肖像を携帶して居る、若し支那で自分と同等の地位ある官吏が自分の持つて居る英吉利の國王の肖像に對して三跪九叩禮をするならば、自分も支那の皇帝に對して同様の敬禮をしてやらうと云ふ強い主張までした。とにかく此人は、熱河へ往つて、當時大天幕の中に蒙古王公などを引見して居つた乾隆帝に謁見したのであるが、其の敬禮の争ひはどう片付いたか、少しそこは曖昧であつて、或は三跪九叩禮をやつたと云ふ話もあり、又やらなかつたやうにもあるが、とにかく支那へ來た外國使臣の中で斯の如く自分の尊嚴を固持したのは此人が始めてゐる。それにも拘らず乾隆帝が其時に英吉利の國書に答へる支那の國書には、英吉利國王に

論す、眞先に書いてある。それから爾がどうか斯うとか、總て、爾と云ふ語を用ひて居る。さう云ふやうな譯で、それ程氣張つた英國の使者マカートニーが持つて居る返事でも夷狄の君長に遣る如き返事と同一にしたものである。それが今より百十年ばかり前のことであるが、其後嘉慶帝の頃などにも使者が來て居るが、是以て矢張り待遇が好くなつた譯でない。詰り支那と云ふものが、外國と自分の國とが同等だと云ふ事を認めるやうになつたのは、外國と戦争をして敗北した結果である。

### 對外戦争の失敗

それは道光の二十年より二十二年迄續いた阿片戦争の結果であつて、それが僅に今より七八十年前に當つて居る。詰り一遍戦争をして負けた爲に五港を開港場とし、さうして外國と條約をすると云ふことになつた。支那人が自分の國の記録として書いて居るのには、矢張り西洋人を綏撫した



とある。併し兎に角條約文面は同等に書かなければならぬから、此時に始めて同等に書いた。それから後又英佛聯合軍の爲に北清に乗入られ、殆ど北京落城の如き運命になり、そこで以て大分夷狄と云ふものは強いものだと恐ろしいものだと言ふことを悟つた。又其時分から始めて外國の事務を取扱ふ役所が出来た、それ迄は實は斯う云ふものは無かつた。外國事務を取扱ふものは理藩院とか四譯館とかと云ふやうな處があつて、是は蒙古などのやうな屬國又は緬甸とか暹羅とかいふやうな朝貢國の事を取扱ふのであるが、其外は外國の船の到着する廣東の地方官の手加減で斯う云ふ方面の事務を取扱つて居つた。英佛聯合軍の侵入以後、總理各國事務衙門といふものを置いたのが支那人が外國と同等の者だと云ふことを自ら認るに至つた始めと云つて宜しい、これは即ち總理衙門で、後に外務部となつたのである。併しこんな衙門まで出来ても、西洋人と云ふ者は随分軍艦などを持つて來て邊海をあらす厄介なものだ位に思つて居つたのであるが、そ

の恐ろしいことは大分分つて來た。だが此時までも日本などは少しも恐ろしいなどは思つて居なかつた。臺灣の生蕃を征伐したり、琉球の藩を廢したり、朝鮮へ手を着けたりするので、西洋の眞似事をするウルサイ奴だとは思つて居つたらうけれど、日本の實力などは分つて居なかつた。東夷の小醜生意氣だといふ調子であつた。所が明治二十七八年戰役に於て散々に敗れて、ソコで今度は國の大小に係はらず、外國は侮り難いものであつて、自分の國は世界の國の一國で、而も最も弱い國の一であると言ふことが始めて分つた。さう分つて見ると急に外國が怖くなり、變法自強主義が起り、同文同種など、いふ觀念が生じたのである、即ち種族と云ふ考がだんだんに發生して來た。夷狄などは中國の裾にヒツ附いて居るのでなく、變つた種族のものが各、獨立の國を成し、而もそれ等は皆自分より強いものだと言ふことを考へ出したのである。

それだから支那の中でも早く外國人に接した地方は矢張り早く此觀念

が起つて居つた。即ち道光の阿片の亂などで最も早く外國人に接した廣東人などは最も早く種族の觀念を持つたのである。尤も支那と云ふ國は此度に限らず外國と戦争をして敗けると時々種族の觀念を起すのである。ずつと前に宋が蒙古の爲に亡ぼさるゝ時にも此觀念が非常に強くして、最後まで奮戦した。隨分支那の革命は色々あつても、多くは疊の上で革命が成立つてしまふことが多く、最後迄奮戦したと云ふことは滅多にない。然るに宋の滅びる時には從來にない奮發の仕様で最後迄戦つた。是は其時に蒙古人の様なものに亡ぼされるのは實に殘念であると言ふ種族觀念を起したのである。それから明が今の清に亡ぼされる時も、亦此通りで最後迄花々しく戦つた。さう云ふ風で外國から侵略されたり敗けたりすると直に種族觀念を起すが、それが強くなると所謂咽喉元通れば熱さ忘るゝで、直に又天下とか中國と云ふ考へになる。どうかすると夷狄から起つて、支那に君臨した今の清朝の如きも、一旦支那に入つてしまへば、やはり自ら中

國の主といふつもりで、四夷を輕蔑するやうになる。そらして又失敗して種族の觀念を起すといふ順になるが、清朝が夷狄から這入て來た種族で、それが中國の君主たる時代に外國との關係が開けたのであるから、現在支那の種族觀念は二重になつて居る。

### 二重の種族觀念

即ち一は支那全體より見たる外國人に對する種族觀念で、他は明が清朝に亡ぼされた時の歴史を回想して、清朝に對して發せる種族觀念である。日清戦争以後公にせられた新しい著書、又は舊い本の新刊せられたものの中には、滿洲人に對する反抗の思想が著しく現はれて居る。尤も滿洲人に對する反抗の思想は清朝になつてから二百年間絶えず出沒して居つたのであるが、康熙、雍正、乾隆頃に盛んに此の思想を強壓したので、一時反抗思想も微弱になつて沈靜して居つたのが、日清戦争以後中央政府が弱はり出し

てから此反抗の思想が又勃興して來たのである。明代に於て滿洲の事を侮蔑した語のある書籍、又明の遺民、其他の不平の人士が清朝に對して不平を述べ、或は罵倒をした書籍、是等は乾隆頃に天子の訓令で銷燬され、勿論其後出版を禁止されて居つたのみならず、それを所持して居つても刑罰に處せらるゝ位であつた。處が此頃になつて再びそれ等が世に出で公然賣買され、又は出版されたるものもある位である。詰り清朝と云ふものは外國に對する關係上、外國に對して種族觀念を人民に起させると同時に、又自分が支配して居る國民から自分に對して種族觀念を起されて居る。

それで今度の革命軍なども興漢滅滿と云ふことを標榜して居る。それは近年になつて勃興して來た所の種族觀念の塊であつて、其前の義和團の事件の時などは外國人排斥で起つたのであるが、それは今日では大分なくなつた。今の革命黨などは外國で學問をして來た大分進歩した思想を持つて居るから、其方は今度は止めて、第二の内部の種族觀念に向つて精力を

集中して來たのである。處が是は外國の様な強い國で以て、外國人に反抗思想を起すと打潰すと云ふやうなものと違つて、清朝が如何にも弱はり切つて居る強弩の末勢といふやうな處へ、さう云ふ觀念を起されたから、今日のやうに旬日を出でずして土崩瓦解するやうな形勢になつて來たのである。是が思想上に於て今日の清朝が受けて居る打撃の一である。

### 尊孔思想の變遷

今一つは是は清朝といふ者と直接關係はないが、支那人の思想上に近年隠然として容易ならぬ變調を起して居る。それは支那人全體に行亘つて居るかどうかは疑問であるが、兎に角最近の教育を受けた階級のものには随分行亘つて居る。

それは尊孔思想の變遷と云ふことである。此由來を申しますと長くなるから、古い歴史は切捨て、仕舞ふことゝして、さうして最近の思想の出で

来たことだけを申しますと、矢張り道光の阿片の亂の少し前頃から、何も外國のこと、關係がある譯でないが、一種の變つた思想が支那の學者の間に行はれて居つた。それは一方には孔子を極端に尊敬する所の思想である。此思想は今から八九十年前から新に起つたのであつて、公羊學の一派である。公羊學と云ふと春秋に傳が三ある、即ち左氏傳、公羊傳、穀梁傳の三傳であるが、此中の公羊傳の説を主張する學派を公羊學派と云ふのである。此學派に随へば經書は從來から皆あつたので、それを孔子が幾らか修正したと云ふのではなくて、あれは皆悉く孔子が作られたものであると云ふ説になる。即ち六經悉く孔子の作る所と云ふ説である。詰り孔子は從來の制度を變革して仕舞つて、さうして新らしく自分の理想の制度を作る爲に春秋を作つた。此の春秋には微言大義といつて、孔子が其の高弟に口傳で授けたものがある。公羊傳は即ち此の微言大義を筆記したもので、これに孔子の經世の眞意が遺つて居る。それで何でも公羊傳が一番大切であつて、

公羊傳の考で以て外の經書も皆批判して行かなければならぬと云ふ議論で、それが又擴大されて、すべて公羊傳と同時に西漢時代に行はれた今文の學は皆孔子の正傳である、東漢以後に盛んになつた古文の學は取るべからざる者とするのである。古文今文の學といふことは、一寸込入た事であるが、簡單にいへば、今文とは漢の時に普通に用ひた文字、即ち隸書をいふのであつて、古文とは當時已に通用しない籀文以上の文字をいふのである。秦の始皇が書籍を焼てから、漢の初めに學問が復興する時に、伏生といふ老人が口授した尙書などを、先づ當時通行の文字で書き顯はした、其他の經書も皆同様に隸書で書いたので、孔子の時の通行文字は勿論古文であるけれども、それは當時已に通用しなかつたので、漢の時の通行文字で書いたのが、今文の經書で、西漢の官學では、この今文の經書が行はれて居つた。其後孔子の舊宅の壁中とか、或は方々から發掘された本が出て來て、それは皆古文で書いてある。西漢の末から、この古文の經書が研究され始つたので、東漢の頃

の學者は皆從來の今文の經書の外に古文の經書を參考にした。中には周禮などのやうに、全く古文の經書ばかりあつて、今文にはなかつたものなども行はれた。之を古文の學といふのである。春秋三傳の中では、左傳は周禮と同様に古文系統の者であつて、今文の時代には主として公羊傳が行はれたので、公羊家の方は今文學になり、左傳の方は古文學になるのである。尤も此古文、今文の説は、西漢東漢の學問を大別した上の命名であつて、かの尙書の今文と僞古文との區別とは、又ちがつた方面の立て方であることを記憶して置かねばならぬ。今文家はかういふ大別をして、其上今文の學は孔子以來嫡々相傳の微言大義を傳へて居るので、東漢の古文は章句訓詁に流れたとして排斥する。古文の説に従ふと、六經は孔子以前からあるので、孔子の有難さを減ずる傾がある、即ち古文逸禮は皆周公以來あつたので、孔子が刪定したのでないといふことになる。公羊家は之を排斥するので、孔子の降誕に對しても種々の奇瑞があること、歴代の帝王と同様であるなど

といつて、當時行はれた緯書といふ好んで奇蹟を説く學問を應用して、孔子を極端に尊ぶのであるが、此思想が近年になつて大に復興して行はれました。現に近年改革派の重なる人はなつて居る彼の目下須磨に居る康有爲等が即ち此學派に屬するのである。康有爲は孔子を基督など、同様に支那の教主として尊崇せんとして居る。斯の如く孔子を極端に即ち帝王以上に尊敬する所の思想が最近に非常な影響を與へて居る。

所が妙なものであつて、斯の如く孔子を尊ぶと同時に、此康有爲等の一派の説では外の諸子は孔子と同様に尊いものである。即ち孔子から段々引續き、支那の古い時代に於て色々の新説を出した諸子は、矢張り孔子同様に尊いものであると斯う云ふ説になる。康有爲等の説では孔子は支那の教主であると言ひながら、孔子の説を段々受け繼いで行つた儒家と云ふものは、矢張り外の學派に屬する所の諸子と同じ程度のものであつて、何も孔子の流を汲んだ儒家ばかりが尊い譯ではないと云ふ議論である。それが餘

程妙であるが、かういふ風な説が段々盛に行はれて来て、近年諸子の學問の研究が大變に盛になつた。

### 老墨の研究

其内最も盛なのは老子、墨子の研究である。殊に墨子の説などは西洋の理學に相類似して居ると云ふので、所謂墨學の研究が盛になつて、墨子などは殆ど孔子と同様の尊敬を受けるやうになつて居る。かういふ思想の傾が益々激しくなつて、現在革命黨に於て一番學者と云はれて居る章炳麟と云ふ人などは、餘程極端で孔子より以上に老子を見る傾がある。さうして是は本當に學問上から批判をしたならば善い處があるか知れませぬが、孔子と云ふものは其道術に至つては孔子の末派たる孟子、荀子にも及ばぬものである、併し孔子と云ふものは非常に才を持つて居つて、所謂經世の才に勝れて居つた人であると云ふやうな議論を云つて居る。詰り其所等にな

ると孔子尊崇の觀念は順々に落ちて来て居る。尤もこの章炳麟と云ふ人は公羊學派ではない。近年又公羊學派に反對した一派が生じて来て、古文學の周禮やら、左傳やらを中心とする學派がある、章炳麟もその一人で、大に左傳を鼓吹して居る。此人は餘程變つた人間であるが、東京の支那留學生の間に大變に人望があり、勢力のある人で、是が長く書いて居つた民報と云ふ雜誌などは大變支那の學生に歡迎されたものである。是が最近の思想に非常に影響を與へて、段々に孔子と云ふものを中心にして崇拜する考が薄らいで居る。

さう云ふ風に支那近年の思想は孔子を極端に尊ぶ所から出發して居りながら、孔子を餘り尊ばぬ所まで行つて居る。それから又モ一つ不思議なのは、公羊學派が孔子を極端に尊んで置きながら、其信仰に於ては段々孔子を離れて来て居ることである。

### 佛教の研究

そしてこの公羊學者の間に佛教の研究が大變に盛になつて來た。この佛教研究の著しいのは、公羊學派の有名な龔定菴と云ふ人からである。此人は大藏を耽讀したらしく、天台を主として、禪にも華嚴にも通じて、非常に佛教に信仰を持つて居る。さうして佛教に對して大法と言ひ、西方聖人の教として是を尊崇して居る。

龔定庵の友人に魏源字は默深といふがある、聖武記の著者で、有名な歴史家である。此人は定菴と深交あつて、最も有力な公羊學者であるが、此人も晩年佛教に歸依した。金陵刻經處といふ南京の楊文會といふ人の版に淨土四經といふものがある、即ち淨土の三部經と華嚴の普賢行願品とを合せて校刻したもので、此校録者は魏源で、自ら菩薩戒弟子魏承貫と稱して序文を書いて居る、此序文は魏源の集にはないもの

である。魏源は老子をも好んで、老子本義といふ著述もあるが、龔定菴と同様佛教に歸依し、殊に淨土の教に傾いたといふことが之で分る。それに就て思ひ當ることは、この楊文會の事で、楊文會は仁山と號し、我が南條博士なども交りがあり、南京に在つて、一生を佛書の出版に盡した人であるが、自分が明治三十二年に楊仁山を南京に尋ねた時、其安ずる所如何と問ひしに、仁山は信仰は淨土、義理は華嚴によると答へたり。魏氏の淨土四經と符節を合せる様で、仁山の佛教信仰の由來がこれで知れる様に思ふ。それから又淨土三經の出版資の喜捨の人名中に西洋數學の大家たる李善蘭などの名も見えるが、徳清の戴子高の名があつたのは、更に面白い。戴子高は非常な學者で早く死んだが、此人がやはり龔定菴の文集などを寫したことがある上に、此人の公羊學は、其同郷の友人たる俞曲園の公羊學に關係があるやうである。俞曲園は近世經學の大家であるが、道教にも趣味を持つて、太上感應編續解といふ

ものを書き、又佛教に興味をもつて居て、金剛經などの解釋をかいた。前後の關係を考へると、戴子高、俞曲園の二人は公羊學のみならず、佛學に於ても、龔魏二氏の感化を受けて、又他の公羊學者に感化を傳へたのではあるまいかと思はれる。これで見ると公羊學者と佛教思想との關係は一時一二人に特發したのではなくして、だん／＼因縁が相續したものであることが知れる。(十二月三十日補記)

殊に康有爲等と同時代の人には、最も此傾が盛であつて、康有爲は華嚴を多年研究したと言つて居る。それで公羊學者でない現在の學者間にも佛教の研究が盛であつて、自分の知つて居る學者の中にも沈曾植といふ現今第一流の歴史家などは其一人であつて、又先年亡くなつた文廷式や、又生存者では夏曾佑などは唯識を深く研究して居る。唯識の外に又禪學も盛である。章炳麟などは唯識と禪とを併せて研究して居る一人である。章炳麟の主張する所によると、支那人は弱い國民で仕様がなから、禪の研

究でもして強くしなければならぬと云ふ譯である。日本でも禪は膽力養成になると云つて研究するものが多いのと同じやうである。兎に角さう云ふ思想は現に支那の學者の間に起つて居る。それが矢張り非常に最近の學問をする人に影響を與へて居つて、兎に角孔子と云ふものは唯偉い人と云ふ考で尊ぶことはありませうけれども、信仰の目的として考へるやうな思想は段々と薄らいで來て居る傾がある。

かうなつて居る所へ持つて來て、外國に留學した年少氣鋭の青年は外國の新らしい思想に觸れる、従つて今度のやうに支那從來の歴史をも思想をも無視して、共和政治を行はうとか何とか云ふ考になるのである。儒教で從來最も重ずるのは五倫であつて、其中にも父子、君臣は非常に重い條目である。しかも共和政體になれば君臣といふものが、全く無くなつてしまふので、倫理上の重大な破壊である。此の如き社會の秩序を無視した、政治上の革命のみに止まらないうで、倫理上の革命をも平氣でやつて行くといふの



は、決して一朝一夕の故ではないので、近世思想の變兆が、遂に此の結果に及んだものと思はれる。尤も一時争亂の際に、種々な不規則な、畸形な思想の横溢することは、支那にも珍らしくないので、長髮賊が耶蘇教の信仰から變形して來たのなども其の一例であるが、かういふのは大抵永續しないに極つて居る。

婦人が非常に突飛な運動をするなども、やはり其一例で、支那の從來の教から言へば、さう云ふことはあり得べからざることであるが、時々かういふ突飛な事がある。明の末に秦良玉といふ婦人が實際戦争をしたことがあり、長髮賊の時には、女兵のやうなものがあつた。支那人は其の教と實際とは平常から一致しないことがあるので、支那人は非常に細君を怖はがる。

伯内とか畏内とかいふことが通り言葉になつて居つて、支那の女は事實氣が強い。しかし其の教としては、ドコまでも社會上の位置として婦人が飛出すべき筈でないのである。婦人の飛出す時はキツト社會の秩序の紊亂

して居り、思想の變調に傾いて居る時である。此の變調といふのがつまり七八十年來、いろ／＼な事情の累なつた結果である。今日になつて革命思想が盛になり、共和政治が行はれ、從來の五倫の條目も破られ、社會の秩序が亂れやうとして居るのは、是は其中心になつて居る所の最近の教育を受けたもの、間に、さう云ふ思想の變調が段々あつたからである。

かう云ふやうな譯で、外の方から刺激されて起つて來た種族觀念、それから内部の思想上の變化、此二つの原因からして、朝廷に對する尊敬の觀念と云ふものが殆ど皆無になつて居つて、何か機會があれば無論爆發す可き譯であつた。それで今日のやうに一度爆發すると最早救ふ可からざる形勢になるのも別に不思議でも何でもない。尤も是が果して永久さう云ふ風になつて行く可きものであるか、孔子の教に依つて出來た所の秩序を破つて、さうしてそれが永久に支那人の間に勢力を得るものであるかと云ふことは是は疑問であつて、恐らくは或時機を經過したならば、今の革命思想に

對する反動のやうなものが必ず起つて来るだらうと思ふ。これにもさうなるべき證據を擧げることが出来ませうけれども、長くなるからそれは省きます。要するに此最近の思想の調子が永久に支那を支配するかどうかと云ふことは分らぬが、兎に角現在にはさう云ふ風になつて來て居るので、今の清朝の幼い天子は酷く運り合はせの惡るい所へ生れて來られたものである。兎に角思想から言つても、さう云ふ風に清朝に對して何等の尊敬の念が無くなつて居るので、長髮賊の亂の時には、地方官は多く城を枕に打死したものであるが、今日は皆逃げる。長髮賊の時は逃げた地方官は嚴刑に處せられたが、今日はそれさへ出來ぬやうになつ居る。今日に於て斯う云ふ革命の亂が起つて來て、朝廷が今にも倒れるといふ境涯になるといふことは實に已むを得ぬ話であります。

### 第三講 下 結論

先づこゝ迄が私の講演の清朝の過去及現在である。それに少しく將來のやうなことを附加へて見ませう。

能く人が清國の時局問題に就て質問を發し、支那の時局がドウなりますかなど、度々聽かれるが、是は甚だ困難なる問題であつて、さう一口に云つて仕舞はれるものではない。それで何か過去の現象に照して將來の判斷の出来ることだけを少しばかり述べて見ませう。

今迄の講演は唯事實を並べたゞけのことであつて、餘り私の氣焰を吐く餘地がなかつたが、是からの話の中には少しばかり私の氣焰が混ざるかも知れません。其積りで御聽取を願ひます。

將來と申しました所が、唯支那が明日からどうなるかと問はれても困る。

其處で先づ將來と云ふことに對して兎に角世の中の人が色々觀察をして居り、責任のある人が幾らか仕事に着手して居ると云ふやうな事柄に就いて私が批評をすれば、自然私の將來に關する考が分るのであるから、さう云ふ方針で話をして行かうと思ふ。

騒亂發生以來滿洲朝廷の運命は時々刻々に傾きつゝある。詔勅續發され、又最近にては憲法十九ヶ條を大廟に宣誓した。處があれは折が好かつたのか悪るかつたのか、丁度宣誓の翌日位に革命軍の漢陽が陥つた。兎に角其宣誓をした憲法を見ると、支那のやうな極端な專制國が一逼に極端な民主國になつたやうな譯で、全く君主の権力は少しもない。それで外交の權も軍事の權も何も彼も君主に無いのであつて、随分極端な憲法が出来たのである。それから引續き攝政王の辭職となつた。大抵滿洲朝廷の運命の到着する處だけは分つて居るやうなことであるけれども、併し一方にそれに対する日本の議論であるか、世界の議論であるか、兎に角近頃評判にな

つて居る所は、どういふ事かといふに、何か仲裁を試みるとか、調停を試みるとか云ふやうな事をやつて居るといふ話がある。

### 仲裁講和論

一體何處へ仲裁を試みるのか分らぬが、さう云ふ話がある。又或る新聞の如きは今日を以て講和の好時機であるなど、論じて居る。所が一體誰と誰とが講和するのか分らぬ。兎に角講和をするのが最も善いこと、世の中の或人が考へて居るものと見える。私の考へでは、どうも斯う云ふ意見に賛成は出来ない。前にも云ふ如く一體誰と誰とが講和をするのであるか、誰と誰が仲裁をされるのであるか。今言ふ通り滿洲朝廷は憲法を宣誓し、其憲法に於て自分は寸毫の權利を國民の上に持つて居らぬことを明らかにして居る。さうして今の天子の父たる攝政王は辭職して居る。後に取り殘されたる天子は五六歳の小兒である。その小兒と革命黨とが講

和をするのでありませうか。さういふ講和が果して成立ちませうか。若し其五六歳になる幼帝に講和をす可き能力があるものとするか、又よし皇太后が其の後見をするとしても、あゝいふ憲法で何の権力のない天子が講和をする能力があるものとするか。あるとすれば、それで差支はないが、若しそれが講和をす可き能力がないものとする、一體誰と誰とが講和をするのであるか。

### 袁世凱

さう考へて見ると、詰り革命黨の講和の相手は今北京朝廷で勢力を得て居る袁世凱でなければならぬ。詰り袁世凱と革命黨の首領とが講和をするのでありませう。此の袁世凱と革命黨との仲裁を堂々たる列強即ち日本とか英吉利とか亞米利加とかがしてやるものと見える。滿洲の朝廷と云ふものが、形式上あるか知らぬが、實際は殆どないと同じである。袁世凱

と云ふ北方に於ては何うか斯うか孤壘を守つて居るものと、夫から南方の革命黨と講和をさせなければならぬので、大國が骨を折つて居ること、見える。さう云ふことは何の效能がありませんかと私は思ふ。之が滿洲の朝廷が保存されて居るとか、又滿洲の朝廷が保存さるべき見込があつて、其君主が列國の君主が有つて居ると大抵同等な権力、同等な地位を有つて居るものであつて、夫が一國の権力の中心であり、主權者であり、夫に對して談判するものがあつて、夫を仲裁をすると云ふならば、随分其仲裁と云ふことも問題になる。しかし今實權を握つて居るかは知らぬが、滿洲朝廷の主權者でも何でもない處の袁世凱といふ者を革命黨の相手方として、夫に對して仲裁をした處が何の効力があらうか。日英米等の諸國がかういふ仲裁をするといふことが事實ならば、随分途方もない感違ひをして居るものと思ふ。一體さう云ふ譯の分らぬことを堂々たる大國がするものとは思はれぬが、新聞に書いて居る處を見て、段々論じ詰めて行きますとさう云ふこ

となる。

### 南北分立論

夫から次ぎに支那を二つに分けさせて、南北の二國として現在の局面を幾らか維持するといふ考へもあつたやうに見える。ソナテ詰らぬことも結局出来る筈はない。新聞で見ると、日本政府も此方針を採つて居つて、政府から北京に使命を帯びて行つた人の受けて居る命令に、さう云ふことが含まれて居ると云ふことがある。夫が事實であるか何うか分らぬが、さう云ふ風な事を考へて居つて、時局を觀て居るならば、途方もない間違ひであると思ふ。併し日本の内閣がさう云ふ詰らぬ事はしては居るまいと思ふ。尤もこの南北分立論は幾らかまだ前の仲裁説より理窟らしくも聽取れるが、併し支那で南北を分立させると云ふことは果して成立つことであるか何うであらうか。一體支那と云ふ國は、南の方に揚子江と云ふ大きな河

が有り、北には黄河と云ふ大きな河がある。其河の流れて居る一方は南方、一方は北方である。夫で丁度二つの川の真中に線に引きさへすれば、南北分立が出来ると云ふのでありませうか。成程地圖の上で見ると何でもなく、何となく、國の分合といふことを地圖の上に線を引くやうに輕卒に考へて居るのは、支那の歴史を無視した話しであつて、殊に支那の近世の歴史に就て全く知識のない人の言ふことである。此事に就ては他の處でも詳しく言つたことがありますが、今此處で簡單に話して見やうと思ふ。

北方は直隸、山東、山西、陝西、甘肅、新疆、滿洲三省及び蒙古地方である。南方は江蘇、安徽、江西、湖北、湖南、四川、浙江、福建、廣東、廣西、貴州、雲南地方である。一寸考へて見ると、斯う云ふ風に全く二分して各々獨立せしむることは容易な事のやうに見える。處がナカ／＼夫が難かしいのである。何うして難かしいかと云ふと、蒙古は亞細亞から歐羅巴へ掛けて非常な大國であつたが、それが元朝の末路に當つて滅亡の大原因をなしたのは、南部の各省の叛

亂であつた。今の浙江省の海岸に方國珍といふ海賊が起つたのが抑も始めで、——すべて地名は今に直して申します——叛亂は次第に大きくなつて、江蘇には張士誠といふものが起り、湖北から江西、安徽へかけて陳友諒といふものが起り、四川には明玉珍が起り、其間に明の太祖が安徽の東部から起つて南京に根據地を据ゑ、手始めに最も強敵である處の陳友諒を打ち亡ぼし、次に張士誠を平げて、引つゞき福建から廣東へ手をひろげ、全く南方を平定して、それから北方征伐となつて元を滅ぼすことが出来たのである。此時に元の朝廷は必ずしも兵力を持って居らなかつたと云ふ譯ではない。元の有つて居つた兵力と云ふものは、山西地方では王保保といふものが大軍を擁して居り、山東にも河南地方にも皇太子が自ら軍隊を支配して居つた、其外陝西地方にも軍隊があつて、兎に角北方一體と云ふものは元の軍隊で支配をして居つた。夫にも拘らず明の兵が南方から進んで行くと、忽ちにして山東が取られ、忽ちにして河南が取られ、それから北京の都が取られ

て、山西、陝西の軍隊は自然に潰散して、全く中原から逐ひ出された。これはどういふ原因かといふに、其前から南方の叛亂の爲に元の朝廷の財力が非常に衰へて居つた結果である。何故財力が衰へ財政に苦んで居つたかと云ふと、随分昔から即ち唐の頃からして直隸即ち今の北京附近に對しては、南方から食糧を送らねば立ち行かぬことになつて居る。それだから其處に都を建てると云ふと、其地方の方では到底政府を維持することが出来ぬ。其政府が何うして維持するかと云ふと、南方から年々米なり金なりを送つて居つたから出来て居つたのである。元の時には米を南方から送つたのである。江蘇地方より毎年北京へ海運に由つて送る米は元の量で三百三四十萬石位に達したことがある。我邦の量では、ザット半額と思へばよるしい。夫を以て北京の食料なり經濟を支へて居つた。夫から其外に湖北湖南地方からも運河を経て北の方へ米を送つて居つた。さう云ふことは元の世から始まつたのであるが、明朝になつても清朝になつても依然として

同様であつて、さうして明朝以來、海運は一時無くなつたけれども、兎に角江南の米を北方に送つて、さうして北方の政府を維持すると云ふことだけは元以來依然として變らぬのである。處が元の末年に江南の地方が悉く叛亂をして朝廷へ米を納めない。其處で元朝では彼等に官職を與へて米を送らしめやうと試みたが、彼等は官職は唯だ貰つたが、張士誠が一度十萬石ばかり送つたに、其後はドーしても北京に送らぬと云ふ始末であつた。しかして二十年も繼續して、元朝の大に困しんで居る處へ、其内に明の太祖が南方を平定して北上したので、遂に元が滅びて仕舞つた。之は元の時の話である。何うかすると支那の歴史を讀む人は、唯だ大掴みに支那はいつでも北から侵略され滅ぼされたものであるから、何んでも北方が強いものと考へて居るが、實は支那の内部に立入つて能く考へて見ると、今いふやうに南方の収入が重大な關係を持つことになつて居る。夫で自分の考へでは、今日南北が分立するとして、北方が能く南方に對抗して行くことが出

來るか何うかと云ふことが疑問であると思ふ。

處が之に對して人の見やうといふものは、随分ちがへばちがふもので、或る大政黨の中に政治家でもあり文學者でもある人がある。其人が或る雜誌に書いたのを見ると、南方は北方に對して對抗することが出來ぬといふこともあるまいなど、言つて居る。自分等は北方が南方に對して對抗が出来るか何うかと云ふことを疑問として研究しやうとして居るのに、此人は南方が北方に對して對抗が出来るか何うかといふことを疑問として居るのである。之は勿論政治家の研究の仕方と、我々の如き學究の研究の仕方と違ふからでありませうが、随分思ひ切つた見やうの差である。

### 形勢の不利

今日の形勢を見ると、漢陽は官軍の爲に恢復されても、武昌はまだ革命軍の手にある。南京も已に革命軍の手に落ちた。さうして江西邊りから湖

北に向つて援軍を送つて居ると云ふことであるから、湖北と江南との聯絡が付いて居るものと見える。南方一體は遠からず一團になる者と見てよろしい。然るに今の朝廷の形勢では、元末よりも餘程劣つた地位に居る。山東省などのやうに實にアヤフヤな處がある。元の時には王信といふ人が義兵を率ゐて元の爲に守つて居つた。今日では此山東は獨立したり獨立を取消したり頗る曖昧な事を行つて居る。又山西にも叛徒が起る、今は北京朝廷のものではない。山西省の商人といふものは、北方の錢莊即ち銀行の全權を握つて居る。太原府が其中心點である。然るに已に其處に革命軍が起つて居る。陝西地方にも已に朝廷の命令が行はれて居らない。蒙古も獨立して居る。どうかかうか朝廷の命令が行はれて居るのは直隸省と袁世凱の郷里である河南省とだけである。然るに直隸省の中でも、その中心であり、北京朝廷に近い處の天津にある諮議局と云ふ地方議會は、北京朝廷が金を外國から借りて征討費に使ふと云ふことに酷く反對して居る。

る。一向之は味方として甲斐のないものである。さう云ふ風に今日の清朝の有様は元の末年に比べて見ると、一層割りが悪るい。

何んでも此難關を切抜けるのは外國債を起すに限ると云ふので、其方に骨を折つて居るが、何うも埒が明かぬ。實際今のやうな清國の状態では之に金を借すやうな醉狂な人は一人もないものと見える。外債は出來ず、江南の仕送りは絶える、直隸省と河南省だけの財政では南方各省の革命軍を征伐するだけの見込は到底立たない。内帑金を引き出した處で、際限は大抵知れたものである。若し各國が干渉をせず黙つて懐手をして喧嘩をさせて居つたら、獨りで極まることが明かに分つて居る。

即ち外國が干渉しないとすれば、北方の九省が悉く北京朝廷の命令を聞いても、とても南方に抗することは出來ぬ。是は經濟上の關係である。それは矢張り明治二十六年頃ジエミソンといふ人の調子であるが、その調に依ると、南方各省と北方各省の負擔額を別けると、南北各省が北方の各省に向



つて餘計に負擔して居ることが、總額八千九百萬兩の中二千萬兩程多く負擔して居る。それは財政の方から言つたのであります。それから又貿易額の方面から見ても、非常な差を持つて居るのであつて、北方の貿易額は遙かに南方の貿易額に及ばない。北方の各省の貿易の中心となつて居る所の天津の貿易額は六千萬兩乃至七千萬兩である時に、南方の中心になつて居る上海の貿易額は二億六七千萬兩の巨額に上つて居る。詰り經濟上の實力に於ては南方は北方の四倍にも五倍にもなつて居る。若し兩方とも何處からも外國から干渉せず、さうして支那を半分に分けて戦争させて置いたならば、北方の財力は南方の財力に對して到底支へる力がないものである。今まではまだ北方には中央政府があるから、幾らか中央政府と云ふものに多少信用を置いて、外國から軍器などを密かに賣込むものであるから、それで漢陽の回復も出來たのであるが、若し外國の干渉が絶對になかつたならば、到底北方が南方に對して支へる力がない。

それであるから、外國に關係なしに内輪だけで戦はして置くか、或は二の國を立てさせて置いた所が、それは到底五年なり十年なり續く譯でない。若し續いたとしたならば、北の方の立てた國と云ふものは非常に割の悪い國で、南方に立てた國は非常に割の善い國で、南方は富力を以て發達して行くのに、北方の國は段々と疲弊して今日の波斯の如くになつて仕舞ふ。そんな國を袁世凱が如何に眼先が見えないと言ひながら、引受ける譯がない。故に此際南北の分立を行はせるなど云ふやうな事は、實に支那の事情に通ぜないものと言はねばならぬ。

一體支那と云ふ國は統一さるべき國である。滿洲朝廷が復興して、或は袁世凱がペテンを行つて、皆く支那を統一するか、或は革命軍が共和政府を組織して遂に統一の實を擧ぐるか、何れか一に歸すべきである。縱令外國の干渉か何かで南北二國を作らせて見るとしても、北方の國は引受手が無い。日本に呉れると言つても、日本は御免を被つた方が宜い。もしさう云

ふやうなことを考へて居るものがあるとするれば、それは随分御苦勞な空想を描いて居るものといはねばならぬ。自分は何も革命黨のまはし者でもない。此處に居つて革命黨を謳歌した所が早速これが無線電信で支那に響いて漢陽が回復出来やうとも信ぜぬ。又その響きで北京朝廷が蒙塵しやうとも考へぬ。唯學究的に考へて當然さう云ふ結果になるものと思ふのであります。

それから先きの所はどうなるか。

### 將 來

是だけの事實によつても其結果はどうなるか分つて居るのであるが、併し支那のことであるから仲々さう早くは進まぬので、急には私の言つたやうな風に片付きませぬ。是以上將來を想像するのは困難であり且つ無益であります。兎に角革命黨と云ふものは成功するかせぬか、それは言は

んでもよろしいが、革命主義革命思想と云ふものが成功することは疑が無し。

又目下日本には色々のことを心配して居る人があつて、日本の隣りに大きな共和國が出来たら、其革命思想が吾國民に影響を及ぼしはせぬかと云ふやうな心配をして居る人があるといふことである。勿論何でも前以て心配し用心することは結構であるが、併し心配したからと言つて、效力のない事がある。支那に立憲君主國を維持すると言つた所が日本とは國體が違ふ。日本で維新の改革をやつたやうな例を持ち出しても、支那にはそんなことが出来さうな相談でない。又政體の選擇に就いて他國の内政に干渉すると云ふことは、随分昔の神聖同盟などが歐羅巴にあつた時代ならば知らず、今日では餘り流行しませぬ。私の考では當分黙つて懐手をして見て居る方が宜いと思ふ。餘計な心配をする必要も何もない。即ち大勢の推移る所にどうしても推移つて行くのであつて、一つや二つの戦争の勝敗

では決して大局の上に何等の影響を及ぼすことがないのが、支那の特有の事情といつてもよろしい。始終勝続けて居りながら遂に亡びた例さへある。項羽の如きは始終戦争をして敗けたことがない、だんだん盛になりさうなものであるが遂に亡びて仕舞つた。又元の末でも同様であつて、元から南方の叛亂を征討に向けられた諸大將は必ずしも始終敗軍をして居らなかつた。それにも拘らず遂には亡びて居る。支那はどうしても大勢の推移する所は如何ともすることの出来ない國柄である。其處が日本などと大に違ふ所である。故に今日の支那の状態は、是は大勢の推移、自然の成行であつて、今の所官軍が勝たうが革命軍が負けやうが、それで大局が變ずるものではない。何れにしても革命主義、革命思想の成功は疑ないのである。是は幾百年來の趨勢で、今日ではどうしても一變すべき時機に到着して居るのである。列國は此際仲裁や干渉することを止めて、先づ大勢の到着する所を見て居れば間違がないと思ひます。私の學究的の考へから云

ふとさう云ふ結論になります。是で此の講演を終わります。

## 清朝衰亡論 終

明治四拾五年三月九日印刷  
明治四拾五年三月十三日發行

清明治亡臨應付

正價金六拾錢

著者 京都帝國大學以文會

發行者 辻本卯藏

東京市神田區北神保町十一番地

印刷者 金崎金平

東京市芝區愛宕町三丁目十四番地

印刷所 東洋印刷株式會社

東京市芝區愛宕町三丁目二番地



發行所

東京市神田區北神保町  
振替口座東京八壹五  
電話本局三四三二番

弘道館

弘道館出版書目

京都帝國大學 法學博士 神戸正雄先生著

日本經濟政策論

洋裝菊判背皮上製  
紙數五百頁  
正價金貳圓

◎第二版發行するに當り日本財政論を増補せり

京都帝國大學 工學博士 金子登先生著

水力

洋裝菊判上製全一冊  
挿入圖版七十餘版  
正價金壹圓

(最新刊 製本既成)

京都帝國大學 理學士 比企忠先生著

日本産礦物論

印刷中

發行所 東京 神戶 北區 田代 神戶 京都 保一 町五

文部省著作

日本教育史

△上古中古近世に分ちて日本の教育と學校其他の教育等を叙述詳論したる者

◎洋裝菊判上製全一冊

◎正價金壹圓

東京帝國大學心理學教室編纂

實驗心理寫眞帖

△實驗心理の關係は開かれたり、一たび本書を披かば坐して心理實驗の實況を見るべし

◎洋裝四六二倍判上製全一冊

◎正價金壹圓六拾錢

東京高等工業學校教授小林豊造先生外拾壹教授編纂

工人寶典

△法制、經濟、貿易、交通、機關通信、人文地理歴史、發明、機械、電氣、建築、應用化學、染織、漆器、陶器、磁器、金工、製版、諸表、公式等を載す

◎洋裝菊判裁判形上製全一冊

◎紙數七百餘頁

◎正價金壹圓貳拾錢

工學博士 櫻井省三先生 工學博士 寺野精一先生 外拾壹大家編纂

日本近世造船史

△本邦未曾有の造船史

◎本文附圖全二冊

◎紙數壹千餘頁

◎正價金七圓

弘道館出版書目

東京帝國大學 文學博士 井上哲次郎先生著

倫理と教育

◎洋裝菊判上製  
◎紙數六百三十餘頁  
◎正價金壹圓五拾錢

▲博士が精選の意見、温健の説を知らんと欲するものは本書に來れ

東京第一高等學校校長 新渡戸稻造先生著

歸雁の蘆

◎洋裝頗る美本函入  
◎挿畫十數葉挿入  
◎正價金壹圓

▲學生、教育、宗教家諸君紳士淑女諸君の必讀書◎破天荒の歡迎

東京高等師範學校講師 百理章三郎先生著

少年鑑

◎洋裝菊判頗る美本函入  
◎木版寫真版挿畫百個  
◎正價金壹圓七十錢

盛岡高等農林學校校長 玉利喜造先生著

實用倫理

◎洋裝菊判上製全一冊  
◎紙數四百五十餘頁  
◎正價金壹圓五拾錢

▲修身教授の絶好參考書、學生諸君の最良修養書

弘道館出版書目

東京帝國大學 文學博士 福來友吉先生譯

教育心理學講義

◎洋裝菊判全一冊  
◎數三百餘頁  
◎正價金壹圓

△教育心理活用の唯一指針

文部省視學官兼 榎山榮次先生著

教育教授の新潮

◎洋裝脊皮上製  
◎紙數八百餘頁  
◎正價金貳圓

△本書は教育教授の理論并に實際に對する革新の新聲也

東京帝國大學文科大學助教授 文學士 吉田熊次先生著

系統的教育學

◎洋裝菊判上製  
◎紙數八百餘頁  
◎正價金貳圓

△教育界の明星出現

文學士 北澤定吉先生著

倫理學史綱

◎洋裝菊判上製  
◎紙數四百餘頁  
◎正價金壹圓卅五錢

△倫理研究者の燈火○文部省檢定受験者の絶好參考書

發行所 東京 神田區 北神保町 弘道館

發行所 東京 神田區 北神保町 弘道館

弘道館出版書目

東京帝國大學 文學博士 元良勇次郎先生著

心理學綱要

△本書は如何に世の歡迎を受けてあるか賣行の驚へく迅速にて  
も知れ

版二十

- ◎洋裝菊判全一冊
- ◎紙數三百卅頁
- ◎正價金壹圓

東洋大學講師 文學士 紀平正美先生著

最新論理學綱要

△世評論理學書中の泰斗なりと本書は一時速成の著にあらず

版五

- ◎洋裝菊判全一冊
- ◎紙數三百餘頁
- ◎正價金壹圓

東京帝國大學 農科大學教授 理學博士 石川千代松先生著

進化的動物學綱要

△動物研究に志すものは必ず本書より始めよ

刊新

- ◎洋裝菊判上製
- ◎插畫木版密書七十餘個
- ◎正價金壹圓參十錢

文學士 北澤定吉先生著

哲學史綱

版四

- ◎洋裝菊判上製
- ◎紙數三百六十餘頁
- ◎正價金壹圓廿錢

弘道館出版書目

廣島高等師範學校訓導 藤井康逸君 廣島高等師範學校訓導 久芳龍藏君 廣島高等師範學校訓導 內藤岩雄君 廣島高等師範學校訓導 新國彦君

綴方教授法精義

本書は心理的なる事、系統的なる事、調和的なる事

版九

- ◎洋裝菊判全壹冊上製
- ◎紙數五百頁
- ◎正價金壹圓五拾錢

奈良縣師範學校教諭 中川壽照先生著

中等農學教科書

理想的師範學校用農業教科書 文部省檢定濟

- ◎上中下全三冊
- ◎正價各冊五十五錢

文部省視學官農學士 針塚長太郎先生 農科大學教員養成所講師 矢田鶴之助先生 共著

農村補習新讀本

- ◎前編後編續編
- ◎全三冊
- ◎前後各貳拾錢
- ◎續編金二十錢

文學博士 井上哲次郎先生 文學博士 元良勇次郎先生 文學博士 中島力造先生 文學博士 三宅雄次郎先生 文學博士 浮田和民先生 文學博士 福來友吉先生 文學博士 加藤玄智先生 文學士 吉田熊次先生 文學士 有馬祐政先生 共著

國民生活と宗教

- ◎菊判形全一冊
- ◎正價金六十錢

發行所 東京神田區北神保町 弘道館 電話本局三四三番

發行所 東京神田區北神保町 弘道館 電話本局三四三番

弘道館出版書目

理學博士 田中正平先生校 理學士 田邊尙雄先生著  
**音響と音楽**

洋裝菊判全二冊  
 挿書木版密書七十個  
 正價金八拾錢

△出版界の珍書音響學著述の嚆矢

陸軍砲工學校教授 理學士 石原 純先生著

**美しき光波**

洋裝菊判上製全二冊  
 挿書二百三十九個  
 正價金壹圓五拾錢

△興味ある理科教授をなさんとするものは必ず讀め

文學博士 加藤弘之先生著

**學說乞丐袋**

洋裝菊判形上製全一冊  
 正價金壹圓八拾錢

神野淺治郎先生著

**兒童理科教授の準備實際**

洋裝菊判形上製全一冊  
 正價金參圓五拾錢

弘道館出版書目

講演者 理學博士 石川千代松先生  
 高等師範 後藤 牧太先生  
 農學博士 川村 清二先生  
 文學博士 姉崎正治先生著

通俗科學講演會編  
**科學講演集**

菊一冊 頗る美觀  
 全價金六拾錢

東京帝國大學 文學博士 姉崎正治先生著

**國運と信仰**

▲博士最近數年間の大論文集めたる者▼

洋裝總布全一冊  
 五頁 裝總布全一冊  
 正價金十壹圓

文學士 北澤定吉先生著

**偉人耶蘇**

▲著者の倫理教育宗教に關する意見を叙して俗學者俗宗教家教育家の頭上に痛撃を加へしもの

菊一冊 全一冊  
 正價金五拾錢

米國ハーバート 最新哲學

**實際主義**

(原名 ブラクマティズム)

菊判形全壹冊  
 八頁 正價金壹圓五拾錢

大國ハーバート 教授 ゼームス博士原著 北澤文學士、吉田文學士、西山哲治合譯

發行所 東京神田區北神保町 弘道館

發行所 東京神田區北神保町 弘道館



弘道館出版書目

農學博士 澤村 眞先生著  
農學博士 澤村 眞先生著  
農學博士 澤村 眞先生著

洋裝菊判全一冊  
挿入密書製圖十八葉  
正價金壹圓拾五錢

農學士 針塚長太郎先生 共著  
矢田鶴之助先生  
農業新讀本

乙種農學校用教科書  
上中下全三冊  
各冊定價二十錢

農科大學教授 林學博士 本多靜六先生增訂  
奈良縣立農林學校教諭 林學士 安藤時雄先生著

林學講義

洋裝菊判全一冊  
紙數約四百頁  
正價金壹圓八拾錢

農學博士 澤村 眞先生著  
農藝化學講義

洋裝菊判全一冊  
紙數四百五十餘頁  
正價金壹圓三拾錢

△極めて實際的に應用的の好著

弘道館出版書目

海軍教育本部海軍中佐 眞田鶴松先生校閱  
片假名信號體操

附二分間體操

弘道館編輯部編纂  
四六判頗る美  
挿入本  
正價金百餘圓  
送料金拾貳錢

樞密顧問官 男爵 金子堅太郎先生著  
日本教育の將來

菊判形全一冊  
正價金貳拾錢

(賜天覽) ▲教育家諸君の一讀を望む▼

東京高等師範學校教授 東京帝國大學文科大學助教授 文學士 保科孝一先生著

言語講話

總布製全一冊  
正價金八拾五錢

(修正參版)

▲言語學の一斑を平易懇切に説明せられたるもの▼

文學士 保科孝一先生著

改定假名遣要義

菊判全一冊  
正價金四拾錢

▲改正の理由、性質、及び如何に教授上に應用すべきかは本書により明らか也

發行所 東京 神田區 北區 神保町 弘道館

發行所 東京 神田區 北區 神保町 弘道館

弘道館出版書目

文學博士芳賀矢一先生監修 東亞協會文藝部編纂  
**曉靄集**  
 四六判形 頗る美本  
 紙數四百餘頁  
 正價金八百拾錢

文學博士井上哲次郎先生文學博士井上圓了先生序 西山哲治編纂  
 文學博士元良勇次郎先生 下田歌子女史 (中村不折挿畫)

**日本家庭辭書**  
 洋裝四六判 頗る美本  
 七百三十一餘頁  
 正價金壹圓三拾錢  
 郵税金拾五錢

▲家庭末代の寶典▼

東京女子高等師範學校教授 東 基吉先生編著

**新案育兒日誌**  
 洋裝四六判全一冊  
 上等數四百五十餘頁

特製脊皮正價金五十錢 並製總クローズ正價金四十錢 送料八錢  
 ▲子ある家庭には必備の寶典▼

早稻田大學 文學士 藤井健治郎先生新著

**主觀道德學要旨**  
 洋裝六菊判形 上製  
 紙數六百五十五頁  
 正價金壹圓九拾錢

▲最も穩健にして最も最新なる學說を聽かんと思は先づ劈頭本書を讀め。▲舊刑陳套の倫理學書に飽きたる者須らく本書を讀め。

弘道館出版書目

司法省參事官法學士泉二新熊先生校 法典研究會編纂  
**新刑正解**  
 附錄 改正陸軍刑法 正文 四六判形 三百餘頁  
 改正海軍刑法 正文 正價金五拾錢  
 郵税金八錢

▲我邦國民は何人も一讀せざるべからざる法典▼

法學士笹川潔先生著  
**日本の將來**  
 菊判形 全六十一頁  
 正價金六拾錢  
 郵税金六錢

▲我政治經濟社會及思想の將來に對する大議論▼  
 ▲我日本の將來は如何に成り行くか▼

法學士笹川潔先生著  
**大觀小觀**  
 菊判形 全六十一頁  
 正價金四拾錢  
 郵税金六錢

▲時に國家を提擧し社會を鞭撻し或は人事を觀し或は自然を詠ふ理趣あり、情景あり以て修養に資すべく又文章の麗とすべし。

學海隱士著  
**成功秘訣**  
 菊判形 全三拾錢  
 正價金三拾錢  
 郵税金三錢

▲受験者の手引草受験の秘奧を闡明せしは本書也と▼

發行所 東京神田區北神保町 弘道館

發行所 東京神田區北神保町 弘道館

弘道館出版書目

鎌倉建長寺管長釋宗演先生著

筌

蹄

錄

△内容は修養談あり、教育談あり、宗教論あり、實業論あり、而も根柢に透徹せる趣味に至つては吾人の表顯し得べき限にあらず

◎四六判形洋装全三冊  
◎正價 金八拾錢

米國兒童研究會長 パーカ博士編 教育學博士西山哲治先生譯

兒童教育に關する 歐米教育大家意見

◎四六判形全一冊  
◎正價 金四拾錢

△小學校の經典として英米の教育界を動かせしは本書也

米國哲學博士 アービングキング博士原著  
鹿兒島縣師範學校教諭 池上弘先生譯

機能主義 兒童心理學

◎洋裝菊判上製全二冊  
◎正價 金六拾錢

米國哲學博士 アイレス氏原著

露天學校

◎近刊◎

弘道館出版書目

盛岡高等農林學校教授 農學士 吉村清尚先生著

最新肥料學

◎洋裝菊判上製全一冊  
◎紙數二百八十餘頁  
◎正價 金壹圓貳拾錢

△本書は肥料に關する一般的の智識と専門的智識とを説く事懇切にて斯界の光明坊間見る幾多の翻譯的の書と大に其趣を異にする

大阪高等工業學校教授 蜂屋貞與先生校  
大阪市立工業學校 齊藤正治先生著

鑛物工業試驗法

◎洋裝菊判形上製一冊  
◎正價 金壹圓

△鑛物の鑑識並に分析を最も詳細に平易に記述せし者

日本女子大學教授 白井規矩郎先生著

最近女子運動遊戲

◎洋裝菊判全一冊  
◎紙數壹千餘頁  
◎正價 金壹圓五拾錢

△嶄新なる女子運動法高等優美の女子遊戲法

東京帝國大學 文學士 小林一郎先生譯  
文科大學講師

らんすき氏讀書論

◎菊判形全一冊  
◎正價 金五拾錢

△内容は社會問題あり教育論あり處世論あり文明論あり附録に婦人論を載す

弘道館出版書目

文部省實業學務局 宇野三郎先生 共著  
東京高等工業學校助教授 野田市三郎先生 共著

工業化學教科書

△文部省制定教授要目準據せる中等程度の工業學校用教科書

文部省普通學務局 福士未之助先生著

普通教育に於ける禮儀教育論

◎洋裝菊判上製全一冊  
◎正價金七拾五錢

賜天覽

久我侯爵題字 三上博士序 清水孝教編  
東久世伯爵題字 芳賀博士序

家庭訓語今日の歴史

△過去數千年間の歴史上の人物出來事を一年三百六十五日に割當先人の遺訓と言行により精神修養の資料となしたる者

文學博士井上哲次郎先生 文學士岩橋遵 成先生 共編  
文學博士服部宇之吉先生 文學士豐島要三郎先生 共編

和論語纂註

◎洋裝菊判上製全一冊  
◎近刊

文學士北澤定吉先生 早稻田文學士宮地猛男先生 共編  
哲學 汎論

菊判形全一冊  
正價金七拾錢

▲哲學研究者の好案内也!!  
▲初學者には好個の參考書也!!

(増訂再版)

東京小兒科病院長 醫學博士 瀨川昌著先生 校  
福岡縣立小倉師範學校校長 織田勝馬先生 共著  
福岡縣女子技藝學校校長 白土千秋先生 共著  
小學 劣等生救済の原理 并に方法  
▲我邦低能兒教育主張者の嚆矢

洋裝菊判全一冊  
正價金六拾錢  
郵税金六拾錢

兵庫縣姫路師範學校校長 野口援太郎先生 闕 原田義藏先生 著  
事實に基きたる 學校教育

洋裝菊判上製全一冊  
正價金貳圓

東京高等師範學校教授 阿部七五三吉先生 新著  
實驗圖畫教授法

洋裝菊判上製全一冊  
紙數七百餘頁  
正價金貳圓六拾錢

▲著者前後十有餘年苦心研究の一大結晶也

弘道館出版書目

弘道館出版書目

學習院教授 佐野正造先生著

最新手工教授書

◎洋裝菊判上製全一冊  
◎正價金壹圓

△手工教授の効果を擧げんとする實際教育家は本書に來れ

文學博士 福來友吉先生校閱 浦谷甫水先生著

教育俚諺心理百話

◎洋裝四六判上製二冊  
◎正價金四拾五錢

△世の民族心理の研究に志す者は唯一の指針也

文學博士 井上哲次郎先生主幹 東亞協會編纂

女大學の研究

◎菊判形 全一冊  
◎正價金六拾錢

△幕府の頃女子教育唯一の寶典の女大學を當今女子教育家及倫理界の明星か新しき見識を以て研究せし者

廣島高等師範學校教諭藤井慮逸先生 久芳龍藏先生新國寅彦先生共著

綴り方文例

◎尋常科兒童用  
◎自二年至六年  
◎前期後期十冊

△綴り方教授改善の曙光は本書を兒童に使用めしせよ

弘道館出版書目

東京帝國大學 文學博士 井上哲次郎先生著

教育と修養

◎菊判形上製全一冊  
◎紙數七百五十餘頁  
◎正價金壹圓七拾錢

△教育界の活問題人間所生の活指南車也

東京帝國大學 文學博士 元良勇次郎先生著

論文集

◎洋裝菊判上製全三冊  
◎紙數五百餘頁  
◎正價金壹圓五拾錢

△博士の精透適確なる所說論斷は悉く本書に收む

東洋大學長 文學博士 井上圓了先生著

哲學新案

◎洋裝菊判上製全一冊  
◎正價金壹圓

△嶄新獨創の新案を樹立し宇宙の謎を解き造化の秘を啓き靈魂の幽を究め人生の奧を明かにしたる明快活達の大文字也

京都帝國大學 文學士 朝永二十郎先生著

人格の哲學と超人格の哲學

◎菊判上製全三冊  
◎正價金壹圓卅錢

△我邦刻下の急切問題たる個人主義對國體主義の檢瀆若しくは調和問題に對する公平なる批判を試みたり

弘道館出版書目

帝國大學文部大學助教授 文學士 吉田熊次先生著

教育的倫理學

△本書は訓練論と共に唇齒輔車の如く始めて教授上の完璧を期せられたるもの悉く實際教育上の金科玉條

文學士 吉田熊次先生著

訓練論

△本書は時代の渴望に投せられたる新來の思潮也

東京高等師範學校訓導 岡千賀衛先生著

自學新教授法

△小學校教授法の根本的大刷新◎發表主義教授法の嚆矢

文學博士 原秀四郎先生著

新編國民地圖

著者が十餘年來心血を凝つて研究されたる日本歴史地理之に地誌地圖とを加へて日本帝國の發達を地圖上より觀察し、嶋國的元氣の保持と海洋主義を鼓吹し同時に一般地理歴史研究の爲に照用に提供せられたり

弘道館出版書目

早稻田大學講師 文學士 高桑駒吉先生著

日本通史

△論斷確的、記事公明、行文流麗にして難澁の跡なく加ふるに多數の歴史地圖を挿入す、史界近來の好著也

東京帝國大學 文學博士 加藤玄智先生著

釋伽牟尼佛

△一小冊子に過ぎざるも佛教本來の面目を顯示し得て遺憾なし

文學博士 遠藤隆吉先生著

東洋倫理學

東洋倫理學の建設者と稱する博士の新著也

文學博士 井上哲次郎先生主幹 東亞協會編纂

倫理研究

△現代斯界の明星十餘名に乞ふて諸先生の蘊蓄と深き研究により成れり

弘道館出版書目

白井悦子 女史 著

西洋料理貳百種

△何人も容易に低廉の材料で風味佳良なる洋食を立どころに調理せられる

◎四六判形全一冊  
◎正價金三拾五錢

伊藤藤銀 月 著

予の半面

◎菊判形全一冊  
◎正價金五拾錢

東京女子高等師範教授

文學士 尾上柴舟 著

挿畫中澤弘光、山本森之介、岡野榮氏

永日

△歌を愛し歌を知らんとするもの本書を得て始めて理想的の絶好資料を獲得す

◎四六判形上製全一冊  
◎正價金八拾錢

學習院教授文學士 藤澤周次先生譯述

新婦

人

東洋女子高等師範の最傑作とする本書は實に近世的問題劇で新舊思想の衝突を描いたものである。

◎洋裝四六判上製一冊  
◎正價金八拾錢

弘道館出版書目

帝國教育會編纂 ●谷千城君、井上博士、三上博士、三宅博士、大槻博士其他の講述

六 大 先 哲

○山鹿素行 ○山崎暗齋 ○中江藤樹 ○伊藤仁齋 ○新井白石 ○青木昆陽の六大先哲贈位祝典大會紀念出版也

◎菊判形全一冊  
◎正價金五拾錢

帝國教育會編纂 乃木大將、小松原文相、井上博士、嘉納校長、三島博士等講述を知す

吉 田 松 蔭

○教育上の好資料たらしめんため最も正確に最も興味ある著書として公にせり本書は五十年紀念大祭の紀念出版

◎菊判全二冊  
◎正價金六十錢

熊本高等工業學校教授高橋正熊先生著

現代生活の危機及救濟

◎菊判形全一冊  
◎正價金六拾錢

△新成切論 || 新教育論 ||

竹越三又君 戸水博士序 山田毅一君著

南洋行脚誌

◎菊判形全一冊  
◎正價金六拾錢

△荷も意氣潑瀾なる男兒は此快書を一讀せざるへからず

弘道館出版書目

東京高等師範學校訓導 阿部潔先生 柿英雄先生共編 (尋常小學一二年)  
新定 尋常小學修身教授書 全二册 ○總布製菊形各册 ○正價金六十五錢

學習院教授 佐野正造先生 東京高等師範學校訓導 岡千賀衛共先生編  
新定 尋常小學算術教授書 全六册 ○總布製菊形各册 ○正價金五十五錢

東京高等師範學校訓導 阿部潔先生 柿英雄先生共編  
新定 尋常小學歷史教授書 一册 ○總布製五年用全一册 ○正價金六十五錢

東京高等師範學校訓導 肥後盛熊先生共編  
新定 毛筆畫教授書 全二册 ○總布製菊形各册 ○定價金七拾錢

東京高等師範學校訓導 肥後盛熊先生編 (尋常六學年用)  
新定 鉛筆畫教授書 全一册 ○總布製菊形各册 ○定價金七十錢

東京高等師範學校訓導 阿部潔先生 柿英雄先生共編  
新定 高等小學歷史教授書 一册 ○總布製 ○正價金六十五錢

文部省實業學務局 泉屋清二郎先生 宇野三郎先生共著  
明治國民讀本 全三册 ○菊形全三册 ○上中下正價各册廿五錢

文部省實業學務局 泉屋清二郎先生 宇野三郎先生共著  
高等明治公民讀本 全一册 ○菊形全一册 ○正價金二十五錢

文部省實業學務局 泉屋清二郎先生 宇野三郎先生共著  
最新實業算術書 全二册 ○菊形全二册 ○正價金廿五錢

茨城縣大湊商業學校長 稻葉鶴次先生著  
小學商業教科書 全二册 ○菊形全三册 ○上卷十五錢中下各廿五錢宛

文學士 保科孝一校閱 文部省實業學務局 宇野三郎 永好信八 佐々木信一共編  
小學國語辭典 ○洋裝三六判形上製全一册 ○正價金壹圓

廣島高等師範學校教諭 藤井慮逸 久芳龍藏 新國寅彦先生共編  
新定 尋常小學讀本教授書 全十二册 ○菊形各册 ○定價六十五錢宛

弘道館出版書目



弘道館出版書目

文學博士 遠藤隆吉先生著

教育國家的建設

菊形全一冊  
正價金二十五錢

文學博士 遠藤隆吉先生著

社會學稿本

菊形全一冊  
正價金二十錢

文學博士 遠藤隆吉先生著

軟教育と硬教育

菊形全一冊  
正價金三十錢

法學博士 有賀長雄先生述

歴史に於ける社會政策

菊形全一冊  
正價金三十錢

文部省實業學務局 泉屋清三郎先生著

商業算術書

洋裝菊形全一冊  
正價金六十錢

文部省實業學務局 宇野三郎先生著

工業算術書

洋裝菊形全一冊  
正價金六十錢

弘道館出版書目

廣島高等師範學校教諭 藤井慮逸先生著

新尋常小學地理教授書

五年用 正價金六十五錢  
全一冊 送料金八錢

京都帝國大學 文科大學教授 西田幾多郎先生著

善の研究

洋裝菊形全一冊  
正價金壹圓

文學博士 遠藤隆吉先生著

東洋倫理研究

洋裝菊形全一冊  
正價金壹圓

帝國教育會編輯 (定期刊行雜誌)

帝國教育

每月一回一日發行  
一冊定價金貳拾錢

東京帝國大學文科大學哲學會編纂

哲學雜誌

每月一回十日發行  
一冊定價金十七錢

弘道館新書目

三重縣師範學校編纂  
基本的  
研究

實驗各科教授法真髓

◎洋裝菊判上製全一冊  
◎正價金 貳圓

京都帝國大學法科大學教授 法學博士 神戶正雄先生著

日本經濟政策論

◎洋裝菊判上製全一冊  
◎正價金 貳圓

京都帝國大學理工科大學教授 工學博士 金子登先生著

水力

◎洋裝菊判上製全一冊  
◎正價金 壹圓

京都帝國大學理工科大學助教授 理學士 比企忠先生著

日本產礦物各論

◎洋裝菊判上製全一冊  
◎正價金

東北帝國大學理科大學教授 理學博士 林鶴一先生著

初等幾何學の形體

◎洋裝菊判上製全一冊  
◎正價金 八拾錢

弘道館出版書目

中等教科研究會編  
統合主義

國文法教科書

◎和裝全四冊  
正價金六拾五錢

中等教科研究會編

平面三角法教科書

◎洋裝四六判一冊  
◎正價金三拾三錢

文學博士關根正直先生校 文部省實業學務局 宇野三郎先生著

明治女子實業讀本

◎洋裝全四冊  
◎正價各冊金廿五錢

早稻田大學講師 樋口蘭林先生著

少女衛生打明け話

◎洋裝四六判美本一冊  
◎正價金四拾錢

弘道館出版書目

京都文科大學教授文學博士 内藤虎次郎先生著  
**清朝衰亡論**

◎洋裝菊判上製全二冊  
◎正價金六拾錢

京都醫科大學教授醫學博士 松浦有志太郎先生著  
**花柳病講話**

◎洋裝菊判上製全一冊  
◎正價金

東京高等工業學校教授米國工學士 關口八重吉先生著  
**工作機械**

◎洋裝菊判上製全一冊  
◎正價金貳圓八拾錢

東京文科大學講師文學士 松浦一先生著  
**トルストイの藝術觀**

◎洋裝四六判上製  
◎正價金六拾錢

弘道館出版書目

東京理科大學教授理學博士 長岡半太郎先生著  
**現今の電氣學**

◎袖珍全一冊  
◎正價金拾八錢

京都法科大學教授法學博士 毛戶勝元先生著  
**株式會社講話**

◎袖珍全一冊  
◎正價金拾八錢

京都醫科大學教授醫學博士 藤浪鑑先生著  
**疾病の原因**

内容通俗病理學の必要○疾病概論○疾病の原因並之に對する手段

◎袖珍全一冊  
◎正價金拾八錢

京都醫科大學教授醫學博士 和辻春次先生著  
**音樂才能と遺傳**

◎袖珍全一冊  
◎正價金拾八錢

通俗學  
藝文庫

通俗學  
藝文庫

通俗學  
藝文庫

通俗學  
藝文庫

10993

# 弘道館出版書目

京都法科大学教授法學博士 中島玉吉先生著  
通俗學 藝文庫 **家督相續講話**

袖珍全一冊  
◎正價金拾八錢

京都法科大学教授法學博士 神戸正雄先生著  
通俗學 藝文庫 **放資講話**

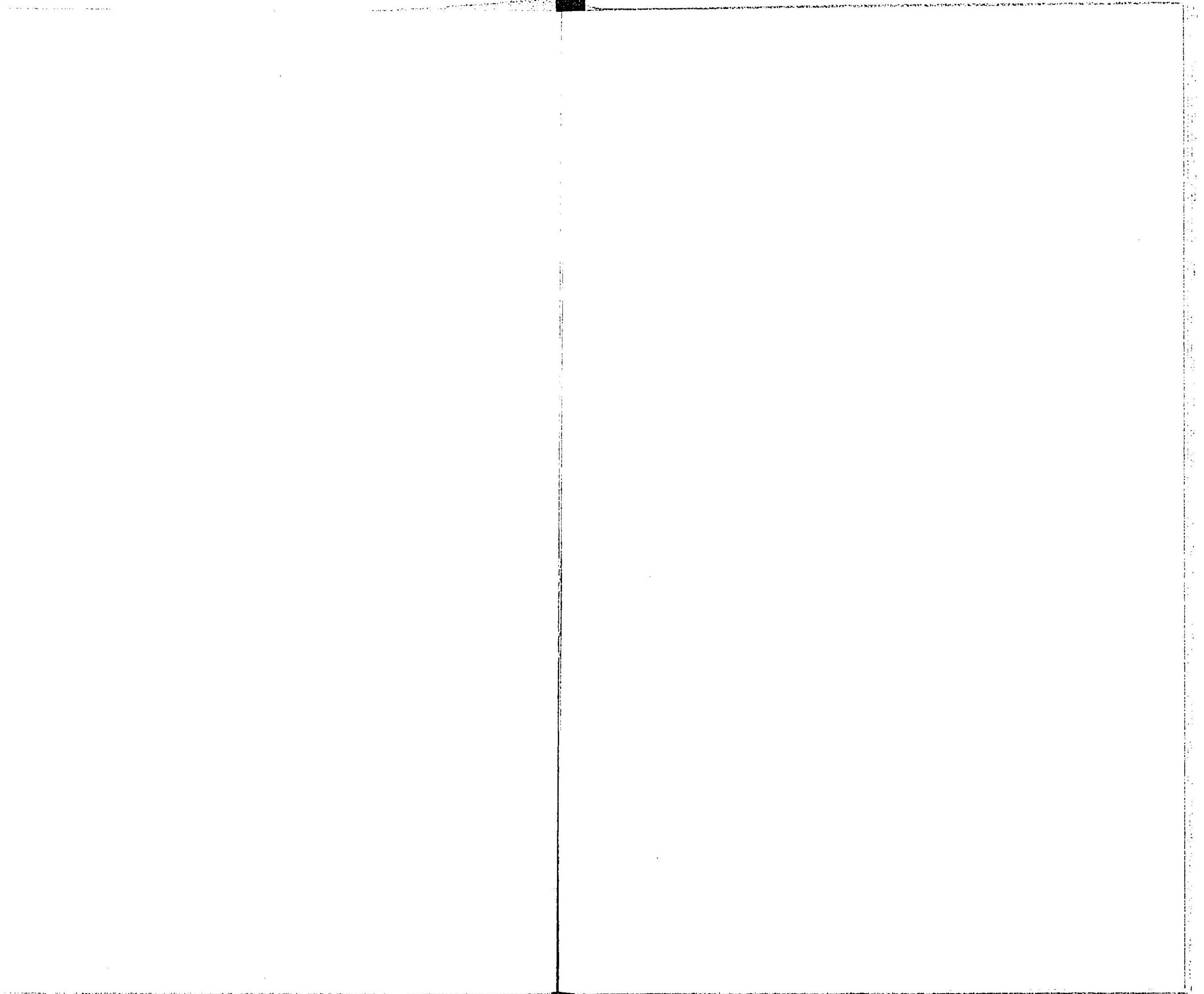
袖珍全一冊  
◎正價金拾八錢

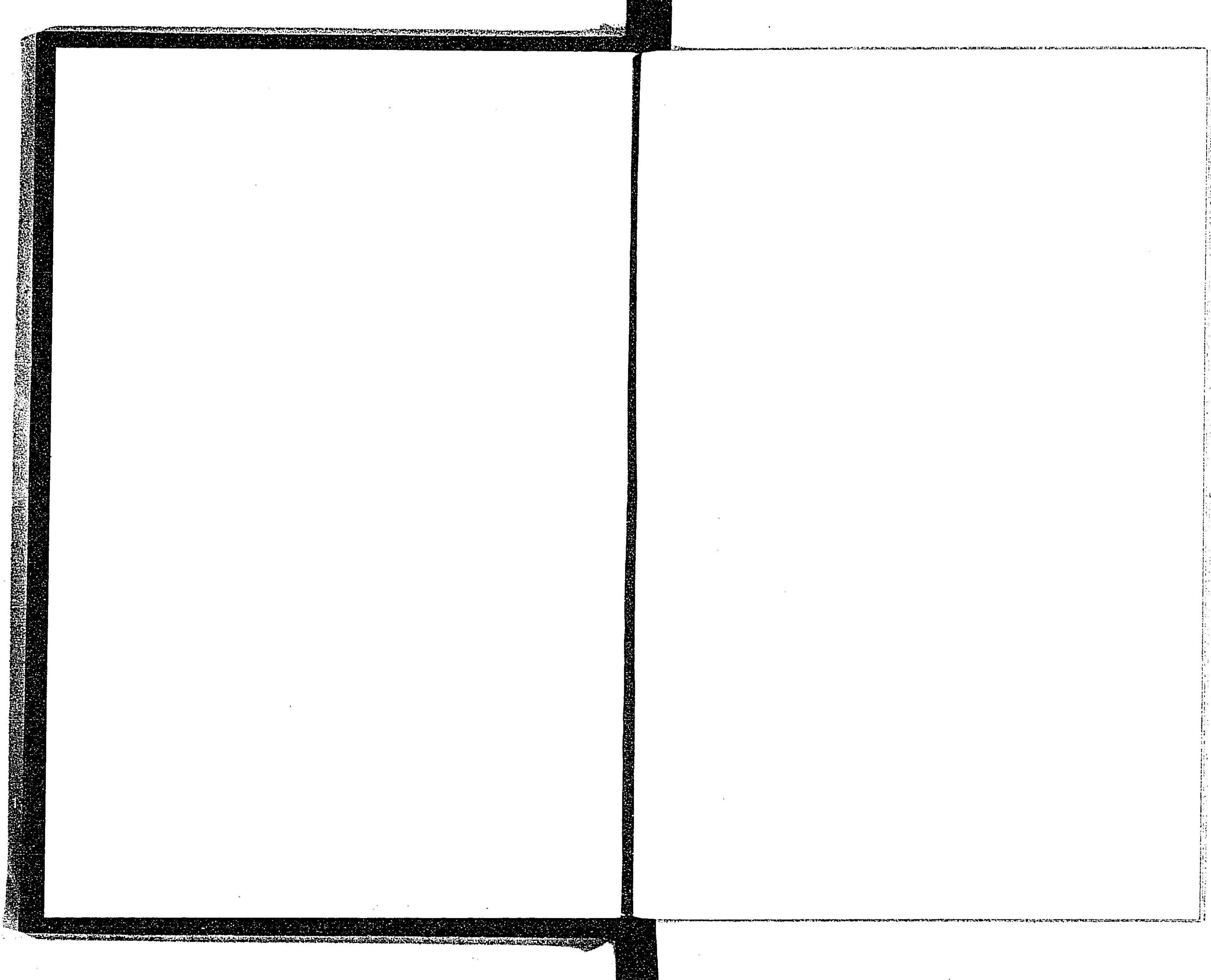
京都理科大学教授理學博士 松井元興先生著  
通俗學 藝文庫 **立體化學**

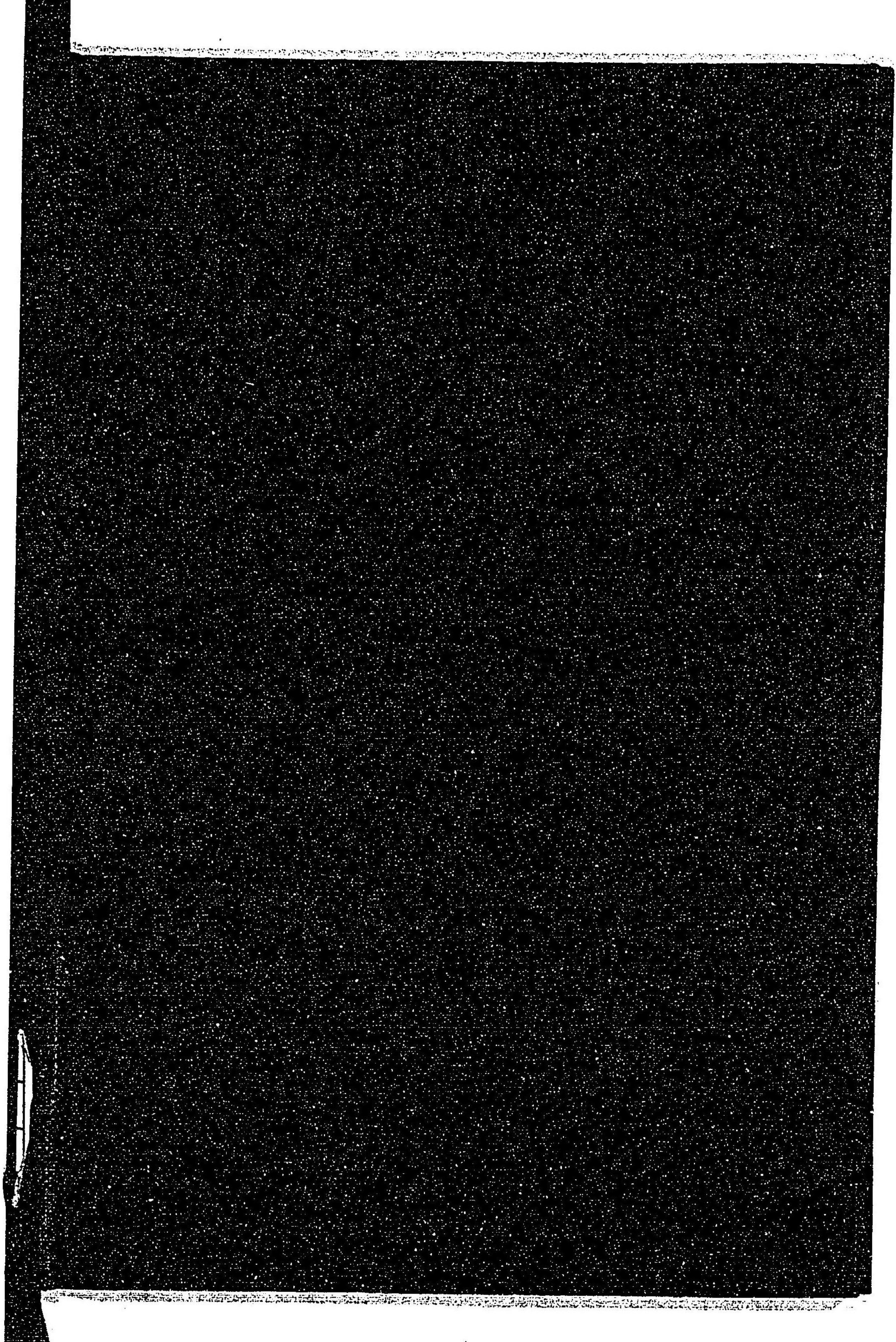
袖珍全一冊  
◎正價金拾八錢

京都法科大学教授法學博士 勝本勘三郎先生著  
通俗學 藝文庫 **刑法の基礎概念**

袖珍全一冊  
◎正價金拾八錢







222.06  
N262.02  
K

003245-000-9

222.06-N262s2k

清朝衰亡論

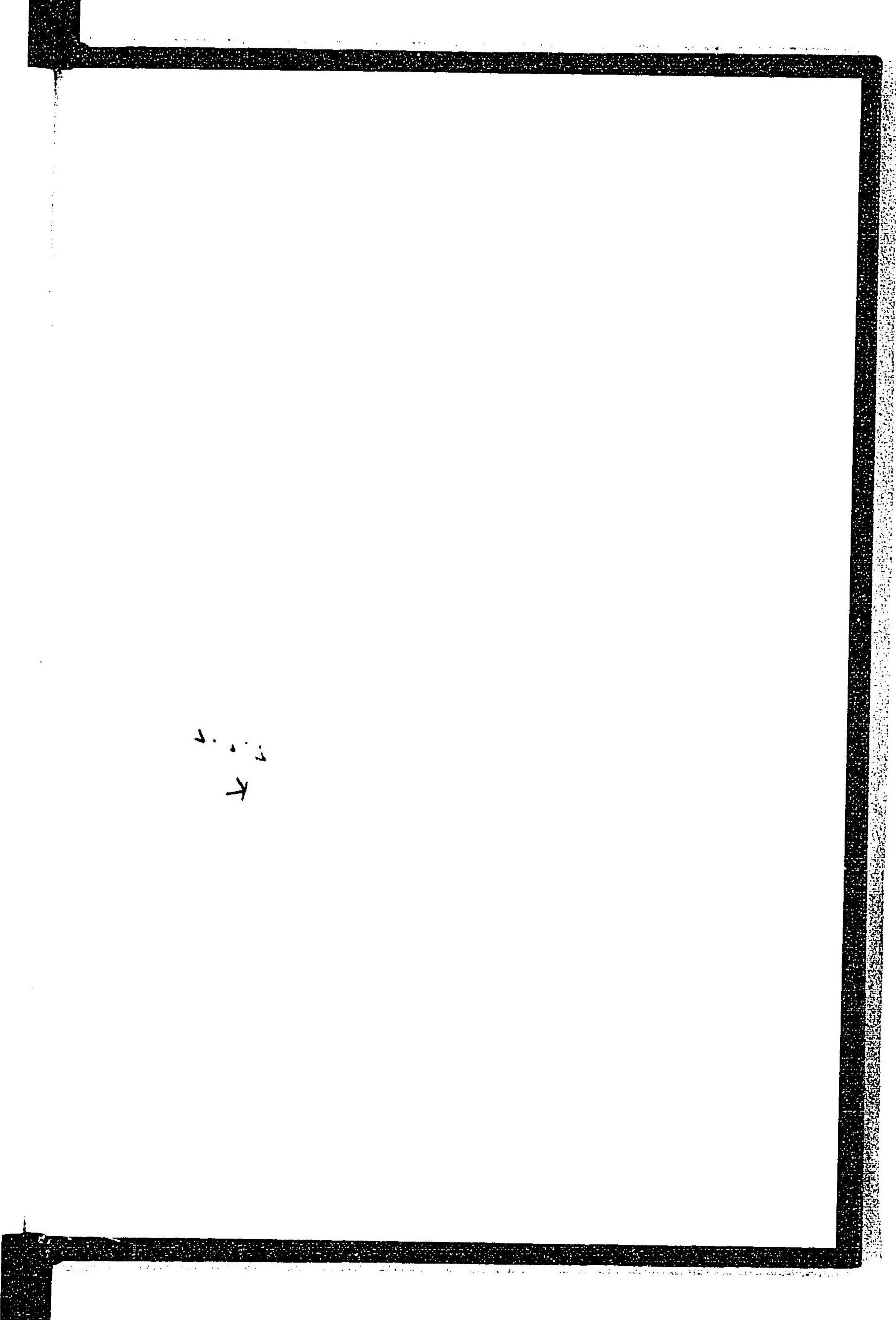
内藤 虎次郎/述

M45

ACC-1539







→  
→  
→

